文部科学省研究事業

「多様性への対応に関する調査研究事業」

～多様な学習ニーズを支える持続可能な体制の構築～

令和２年度　最終年度報告書

神奈川県立横浜修悠館高等学校

目次

Ⅰ　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅱ　令和２年度事業計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

1　調査研究課題名

2　調査研究のねらい

3　調査研究の概要

4　調査研究の具体的内容

Ⅲ　通信制高等学校の学びの仕組みと、横浜修悠館高等学校の重層的支援　5

Ⅳ　令和２年度調査研究事業の内容及び成果と課題・・・・・・・・・・・　9

1　１班（通級の考え方を取り入れた指導方法の研究）

2　２班（ＩＣＴを活用した多様な学習指導）

3　３班（支援体制を活用した多様な教育的ニーズが必要な生徒へのアプローチの検討）

Ⅴ　ＬＤ学会参加報告・発表会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　60

Ⅵ　令和２年度文部科学省研究事業「多様性への対応に関する調査研究事業」に関する研究発表会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　66

Ⅰ はじめに

本校４期目の文部科学省研究事業が令和２年、最終年度を迎えました。全国的な感染防止対策として、人の移動が制限されたため、例年のように他県への研究視察もかなわず、人が集まる会場での研修もオンライン研修へと変更を余儀なくされました。全国の学校が令和２年３月２日から臨時休業となり、本校では４月入学式を中止し、５月に延期した履修登録、レポート配付、教科書購入、すべてが一か月遅れのスタートでした。

生徒も教職員もマスクを必ず着用してソーシャルディスタンスを保ち、フェースシールドや透明のアクリル板で飛沫を防ぎながらのスクーリング展開に加え、放課後は欠かさず消毒を行いました。

このような状況の中で教員間では動画コンテンツ作成の機運が高まり、新着任者のために朝の打合せにおいて、４日連続 15 分間の授業動画コンテンツ作成方法のミニ研修を実施しました。

感染防止対策と学びの保障を両立させるため、在宅勤務や拡大時差通勤を利用して、211 本のレポート解説動画を作成し、「修悠館マイページ」からオンデマンドで配信するとともに、家庭でＷｉ−Ｆｉ環境が整わない生徒や端末を持たない生徒には県教育委員会が学校を通じて貸し出すなど、緊急事態においても、学びを止めない工夫を随所で行いました。

結果、年間レポート提出数とスクーリング参加者数は前年度を上回り、文化祭は３分間動画 79 本を作成配信するＷｅｂ開催となり、生徒も教員もＩＣＴ利活用への積極的な取組が見られるようになりました。オンライン通級、ＩＣＴを活用した深い学びの実践、データベースによる支援の共有化は確実に前進しました。

本校は、通信教育に対する多様なニーズに対応し、「日曜講座」「ＩＴ講座」「平日講座」を展開する新しいタイプの公立通信制独立校（単位制による通信制の課程・普通科）として平成 20 年４月に開校し、13 年が経ち、開校以来、文部科学省の研究事業に取り組んできたところです。

平成 21-22 年：「高等学校における発達障害のある生徒の支援」

平成 24-26 年：「高等学校における特別な教育的ニーズを有する生徒の自立及び円滑な社会参加を可能とする教育課程の編成及び指導方法、評価方法の検討」

平成 27-29 年　「定時制・通信制課程における支援相談体制の構築
―外部機関とのネットワークづくりや重層的支援の充実を通して―」

平成 30−令和２年：「通信制課程における多様な学習ニーズを支える持続可能な体制の構築」

本研究の 3 本柱、『高校通級指導』『ＩＣＴを活用した多様な学習指導』『データベース、修悠館マイページを活用した支援体制の充実』に関し、令和２年 11 月に県教委主催研究発表と文部科学省主催「全国定時制通信制研究協議会」のオンライン発表を通じて、多くの先生方と共有できましたことを大変ありがたく思っております。今後も横浜修悠館高校だからできる教育活動に挑戦し、全国に発信してまいります。

令和３年３月

神奈川県立横浜修悠館高等学校
校長 原口　瑞

Ⅱ　令和２年度事業計画　（令和２年度事業計画書より、本校部分を抜粋一部改変）

１　調査研究課題名

「多様性への対応に関する調査研究事業」

～多様な学習ニーズを支える持続可能な体制の構築～

２　調査研究のねらい

生徒ごとに異なる様々な学習ニーズに的確に対応し、より効果的な支援体制の構築を目ざし、開校から 12 年の間に蓄積された重層的支援システムの更なる改善を図る。これまで構築してきた外部機関との連携体制をより充実させることにより、多様化する生徒のニーズに対し有益な支援となることが期待できる。

通信制には全日制と比べ発達障害等の困難のある生徒が多く通っている。今日の通信制においては、学力や社会性、身体的事情等の多様な困難のある生徒に対して、それぞれに効果的な支援を行い「自立と社会参加」へつなげていくことが重要である。そこで、次のような研究計画を立てた。

多様な生徒への効果的な支援の一つとして通級による指導を行う。多様な学習を支援する本校の学習形態においては、生徒の時間割が多岐にわたっており、通級による指導を受けることへの生徒自身の心理的抵抗感が少ないと考えられる。通信制における「自校通級指導」の組織体制づくりを行い、それと共に、「他校通級」を受け入れるための研究を行っていきたい。

また、本校独自の動画コンテンツ等ＩＣＴ機器を活用した教材を開発するなど、学び直しから上級学校への進学までの多岐にわたる学習ニーズに応えるとともに、教職員間、生徒と教職員間での情報共有の円滑化を図ることを目ざす。

最終年度に研究をまとめるに当たっては、これまでの本校での取組及び研究・実践を、既に訪問した先進事例と比較しながら課題の検証を行い、その際、ＬＤ学会等における最新の取組や専門的知見を参照しながら、全国で活用できる成果として発信することを目ざす。

３　調査研究の概要

一つ目の大きな柱として、通信制における通級の考え方を取り入れた指導方法の確立を目ざした研究を行うことを挙げる。そのために、まずは地域の関係機関との連携、個別の支援計画や生徒のカウンセリング、学習支援ボランティア（ＹＳＫサポーター）の活用などを通して自校における通級指導体制を構築する。その上で、他校生徒の通級に係る指導の受け入れにおける課題の精査と体制の構築を行い、これまで視察や学会等で触れた実践例と、本校における実践プログラム例を比較検討し改善することで、県内のみならず全国に対して還元を図る。

二つ目の柱としては、ＩＣＴを活用した多様な学習指導を行い、学び直しから上級学校への進学まで多岐にわたる学習ニーズに応えることを挙げる。そのために、学会等において示されたＵＤやＩＣＴ活用の事例を参照しながら e-ラーニングシステムを活用したレポート補助教材の配信や、本校教員が作成した動画教材を配信するクラウドサービスを利用した学びの体制構築を行う。

三つ目として、上記二つを補完する役割として本校の支援データベース（ＤＢ）やスクールソーシャルワーカー（ＳＳＷ）を活用した、外部機関や教職員同士の情報共有を円滑に行う支援体

制の充実を図る。

以上の支援体制を通して、様々な困難のある生徒に対して、それぞれに効果的な支援を行い「自立と社会参加」へつなげる効果を高める検証を行うものとする。

４　調査研究の具体的な内容

（１）現状・課題・社会的ニーズ

神奈川県立横浜修悠館高等学校は、県下全域の生徒が在籍する多様な学びを支援する新タイプの通信制単独校として、平成 20 年に開校した。令和２年５月１日時点の在籍生徒数は 2,003 名である。高等学校に在籍する生徒のうち、発達障害を含め、特別な支援を必要とする生徒は一定数はいると言われているが、本校にはそれに加えて身体的・知的・精神的障害のある生徒や、不登校や引きこもり、高等学校中途退学の経験者、外国につながりのある生徒等が多数在籍している。また、貧困を背景に持つ生徒も多い。このように多様な困難のある生徒が在籍する中、生徒の教育的ニーズが多様化しており、生徒一人ひとりの特性に応じた最も効果的な支援を提供できる体制づくりを進めているところである。

（２）目的

本校の生徒は、小・中学校段階からの不登校経験、学力不足、発達障害、知的障害、精神障害、家庭状況等の様々な課題が、時には複数ある場合があり、自尊感情の低さや、コミュニケーション能力に係る課題も見られる。このような多様な困難のある生徒の教育的ニーズに対応するため、「通信制課程における通級に係る指導体制の確立」「ＩＣＴを活用した多様な学習指導の実施」の研究を通して、それぞれの教育的ニーズに応じた形できめ細かな学習指導・支援が実施でき、生徒を「自立と社会参加」へつなげることを目指す。

（３）目標

①　自校・他校通級に係る効果的なプログラムの更なる開発及び発信

・これまでに研究してきた指導体制の提案を実践し、新たに発生する様々な課題を整理し、高校通級プログラムを、修悠館モデルとして確立し、県内及び全国に向けて発信する。

・通信制の自校通級としての適切な単位認定及び他校通級における在籍校との綿密な連携方策を検討する。

②　ＩＣＴを活用した様々な学習指導の実践及び学習支援体制の充実

・ｅ−ラーニングシステムを活用し、これまでに作成した動画コンテンツの配信について、様々な活用方法の充実に向けた環境整備を構築する。

・外部機関と連携した個々の学習支援体制をデータベース化し、その活用の充実を図る。

（４）調査研究の実施方法

①　自校・他校通級に係る効果的なプログラムの更なる開発及び発信

・通級に係る指導体制を整備し、新たに自立活動「キャリア・ポート」として実践指導の場面で生じた課題、問題点について検証し、個別指導の具体例（特にコミュニケーションスキルなどを拡げる通級指導の実践プログラム）を確立する。

・他校生徒を受け入れるに当たって、危機管理を含めた様々な体制づくりについて、在籍

校を交えて研究する。

・通級指導を通して「将来の社会生活を見通した目標」が可能になる実践例を、書籍を活用して検証しまとめる。

② ＩＣＴを活用した多様な学習指導

・ｅ−ラーニングの新システムの稼働や動画教材の配信について環境整備を行う。

・動画コンテンツの活用や「ＩＴ講座」などの多様な学習支援の検討。

・本校の学習支援員・サポーター・アドバイザーなどの外部との連携を深め、支援データベース（ＤＢ）を活用した教職員の情報を共有する等、体制づくりの充実を図る。

・ＩＣＴを活用した指導が生徒の社会的な自立につながった事例を検証しまとめる。

（５）効果測定等の方法

・通級に係る指導の諸課題を整理するとともに、諸課題に対する対応が十分できたか。

・生徒の活動実績が、令和元年度と比較して上昇しているか。

Ⅲ　通信制高等学校における学びの仕組みと、横浜修悠館高等学校の重層的支援

１　通信制高等学校における学びの仕組み

全日制高等学校・定時制高等学校の授業に相当する添削指導（レポート）や面接指導（スクーリング）は、教科ごとに標準数が定められている。

【例】

「世界史Ａ」（２単位）　：　添削指導回数　６、面接指導時数　２

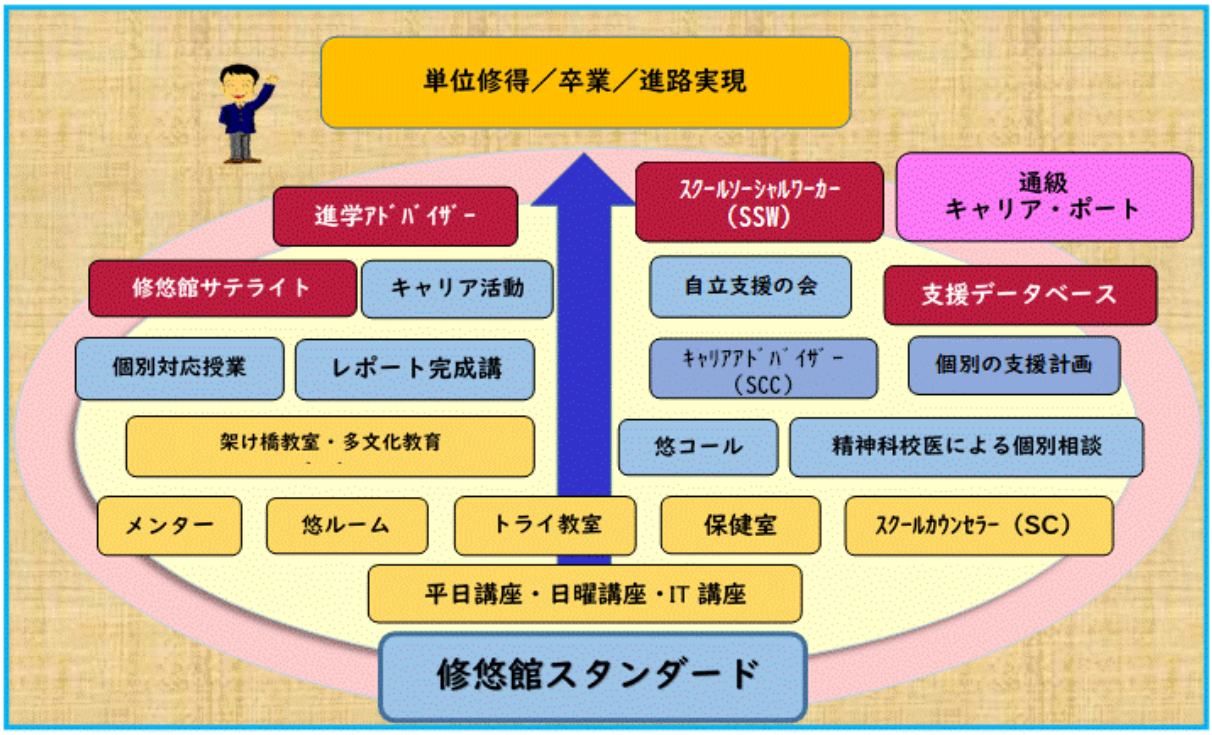
「コミュニケーション英語基礎」（２単位）　：　添削指導回数　６、面接指導時数　８

通信制高等学校では、添削指導、面接指導及び試験の方法により教育が行われているが、「自学自習」を基本とする従来の通信制高等学校の仕組みの中で 74 単位以上を修得して卒業を目ざすには、あきらめずに粘り強く勉強を続ける、強い気持ちが必要となる。

２　横浜修悠館高等学校の重層的支援

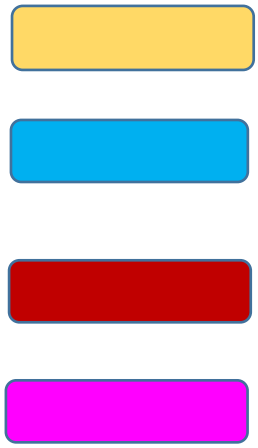
本校は通信制教育の特性を生かしつつ、様々な課題を有する生徒にきめ細かな指導を行い、社会的自立と円滑な社会参加に向け、「日曜講座」に加え、「平日講座」と「ＩＴ講座」を展開し、生徒を支援する様々な支援システム・資源を活用している。

横浜修悠館高校の重層的支援（イメージ）令和３年１月現在



３　横浜修悠館高等学校の重層的支援（解説）

重層的支援とは、様々な支援プログラムが少しずつ横にずれながら階段状の階層構造をなし、各支援担当者が情報を共有する中で、プログラムにつながった生徒が自ら行動できるようになることを目ざす本校の支援システムを示す。



本校開校時からの支援システム

平成 21 年度、22 年度の文部科学省「特別支援教育総合推進事業」、及び、平成 24 年度～26 年度文部科学省指定研究開発学校への取組を通して構築された支援システム

平成 27～29 年度の文部科学省「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」において構築、充実された支援システム

令和２年度からスタートした支援システム

（１）本校開校時からの支援システム

①　平日講座・日曜講座・ＩＴ講座

平日講座は、公立の通信制高等学校では類例のない、平日に登校する機会を増やし、丁寧でよりきめ細かな面接指導を行う講座。スクーリングの設定回数が多い。日曜講座は、従来の通信制の面接指導にあたる講座。ＩＴ講座は、インターネットを活用して、自宅を中心に学習を進める講座。入院や引きこもり状態にある生徒にも学習の機会を提供する。

②　メンター

担任以外で相談したい教職員を生徒が指名し、登録する制度。第１回目の相談は、メンターから生徒へ連絡することになっている。

③　悠ルーム

集団が苦手な生徒の空き時間の居場所として常設。教職員が交代で常駐している。

④　トライ教室

補習教室。月・水・木の５、６校時に実施。「レポート完成講座」に出席する（教室に入る）こと自体がハードルとして高い生徒が、学習支援ボランティア（ＹＳＫサポーター）や教職員からマンツーマンのアドバイスや支援を受けることができる。

⑤　保健室

養護教諭１名と非常勤養護教諭（29 時間／週）により運営されている。生徒にとって、よろず相談の場所、心を落ち着かせる場所、学校に来たらまず立ち寄る場所となっている。また、必要に応じて外部等の各支援機関へとつなげる役割を担っている。生徒の時間割が様々なため、すべての時間帯において利用生徒がいる。例として、令和２年 11 月の利用者数は延べ 702 名（内訳：内科 41、外科 44、こころ 385、その他 232）。

⑥　スクールカウンセラー（ＳＣ）

開校時より、拠点校としての配置を受け、週に１日来校している。

⑦　架け橋教室・多文化教育コーディネーター

外国につながりのある生徒の総合的な相談支援に対応している。

（２）平成 21 年度～26 年度に構築された支援システム

⑧　悠コール

生徒、保護者の悩みに対する専用電話。教職員が電話相談に対応する。

⑨　精神科校医による個別相談

本校校医（精神科）が、個別の相談に対応する。

⑩　個別対応授業

スクーリングに参加しているが、なかなかレポートが進まない生徒について、本人・保護者・学校・相談機関等が連携し、本人と保護者の承諾のもと、「個別の指導計画」を作成して指導を行う。

⑪　レポート完成講座

平日の補習講座。月・水・木の５校時に実施。レポートでつまずいた時や平日講座に出席できなかったときに、個々に教員からの指導を受けることができる。

⑫　スクールキャリアカウンセラー（ＳＣＣ）

令和元年度から、キャリアアドバイザーからスクールキャリアカウンセラーと名称を変更し、産業カウンセラー有資格者が、ＹＳＫサポーターとして、キャリアガイダンスルームＡに複数名常駐し、就職支援を行っている。

⑬　個別の支援計画

校内での支援体制づくりと関係機関と連携した支援実施のため、生徒、保護者の了解を得て支援シートを作成し、就業体験や卒業後の就労等へ結び付ける。

⑭　自立支援の会

参加を希望する保護者の会。学習会や見学会を通して、特別な支援を要する生徒の自立と社会参加を視野に、各種支援制度や相談機関、福祉サービス活用の仕方等について保護者に情報提供を行う。

⑮　キャリア活動

学校設定教科「キャリア」における学校設定科目。希望者を募り実施している。

・キャリア活動Ｃ：一般就労支援のための講座

・キャリア活動Ｋ：特別な支援を要する生徒の自立と社会参加を目ざした通級的指導の講座

・キャリア活動Ｊ：外国につながりのある生徒の総合支援としての講座

⑯　修悠館スタンダード

「発達障害の生徒にとってないと困る支援は、すべての生徒にとって、あると便利な支援となる」をコンセプトに、スクーリング、レポートのユニバーサルデザイン化、環境調整を行い、学校生活におけるすべての生徒が困難に感じていることを取り除く試み。

（３）平成 27～29 年度において構築、充実された支援システム

⑰　修悠館サテライト

「湘南・横浜若者サポートステーション」との連携で設置した相談室。若者支援専門の相談員が、働くことやコミュニケーション等に自信のない生徒の相談に対応し、各種セミナーを実施している。本事業では、不登校の中学生、保護者等の相談も受け、地域の相談支援センター化を目ざしている。

⑱　進学アドバイザー

キャリアガイダンスルームＢで、進学に関する相談等を担当している。

⑲　スクールソーシャルワーカー（ＳＳＷ）

問題を抱えた生徒がおかれた「環境への働きかけ」や「関係機関とのネットワークの構築」などにより、問題行動の未然防止や早期解決を図るため、週２回来校し対応している。

⑳　横浜修悠館高等学校支援データベース（ＤＢ）

生徒の状況を的確に把握することによって、より適切な支援へとつなげるために、入学時に提出された情報や入学後の本校支援システム利用状況に関する情報等を、一元化することを目的としたシステム。

Ⅳ　令和２年度調査研究事業の内容及び成果と課題

１　１班（通級の考え方を取り入れた指導方法の研究）

（１）全般

調査研究に当たっては、「自校・他校通級に係る効果的なプログラムのさらなる開発及び発信」をすることを主眼とした。

研究最終年の目標は、本校が 13 年前から取り組んできた通級的指導である学校設定科目（キャリア活動Ⅰｋ及びⅡｋ）と、令和元年度に他校通級を想定した学校設定科目（キャリア活動ｓ）を検証し、「修悠館モデル」として高等学校における通級による指導のプログラムとなるよう実践研究を行うことである。令和２年度の実践研究としては、３つの取り組みを行うこととした。

①農業体験プログラム

②就労を意識した校外体験活動

③地域資源（行政及び福祉）と連携したプログラム

また、令和２年度から神奈川県で唯一の他校通級を行うにあたり、通級指導を行う学校と、生徒が通う在籍校との綿密な連携が重要であると考え、受講生決定までの経過や、指導期間中における、在籍校との情報共有に関する方法を検討した。

（２）成果

通級に係る指導の諸課題を、本研究を通じて整理し、次のような成果を得た。

①修悠館モデルとしての通級指導の確立

本校で行う通級指導は、卒業後のキャリアを考え、個別指導ではなく、小集団での活動を通してコミュニケーションの方法を学んでいく個別最適な学びを採用することが望ましいと考えるに至った。また、指導形態も、教室で行う学習活動と生徒の実態に応じた様々な校外体験活動を組み合わせたハイブリッド型とした。令和２年度に指導を受ける生徒の実態把握を行うために事前アンケートを行った結果、生徒の多くが、コミュニケーションに困難を感じていることが分かったためである。

本校の通級指導の名称決定にもこだわり、「キャリア・ポート」とした。「キャリア」は生徒が将来歩んでいく人生のことを指す。「ポート」は港をイメージし、自立をするための準備や将来に向けた出発地を連想させるものとした。名称に意味を持たせることで、高校通級の理念や目的が職員や指導を希望する生徒・保護者にも浸透しやすくなった。

通級指導を行ううえで最も大切なことは、生徒が安心して自分の考えを述べ、活動に参加しやすい環境を作ることである。安心できる環境の中で、「できた」体験や「認められた」「褒められた」経験を積むことで、自尊心や自己肯定感が高まり、就労や社会参加に向けた意欲の向上につながっていくものと考える。安全でぬくもりのある人間関係を築くことができる場を作り、生徒が限界を超えて頑張らなくていいと思えて、それを受け入れられる環境（仲間）作りが大切であると考える。言い換えれば「生きる力を蓄える港」作りといえる。安心できない環境であれば、自分自身を擁護したり、立ち直ったりする精神的な拠り所となる「居場所」が持てず、自己を否定するような感情が高まったり、学習意欲の低下や生活習

慣の乱れ、感情コントロールが不得手になってしまう。生徒にとって安心できる居場所として、通級指導の場を運営することが今後も必要である。

（ｉ）令和２年度の指導内容

【学校設定科目（キャリア活動Ｉｋ）月曜１限】

回	日付	単元	内容	ポイント	
★	7/2（木）	校内体験	じゃがいも収穫体験	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
1	7/6（月）	キャリア活動とは？	講座のテーマ、進め方、予定確認	居場所作り、見通し、スケジュール管理	健・人・心
2	7/13（月）	オンラインってなんですか？	zoom会議について、zoomアプリのインストール	生活リズム、発言、聞き方、生徒の様子観察	健・人・心
3	7/20（月）	オンライン・ミーティング練習	zoom会議（練習、教室で）	機器の操作（PC、スマートフォン）、体験	人・コ・心
★	7/27（月）	オンライン・ミーティング	自宅（生徒）と学校	機器の操作、伝えたいこと、話し方、聞き方	心・コ・身
4	８・９	個人面談	前期の振り返り、後期に向けての確認	前期にできたこと（承認）、生徒の興味関心、体験希望の有無等	
★	８/13（木）	校外作業体験	食品製造、受注軽作業	福祉事業所（地域活動支援センター）体験、作業、５Ｓ、安全、公共交通利用	心・人・身
5	9/28（月）	夏の振り返り 文化祭に向けて①	夏の出来事の発表 オンライン文化祭について	後期の見通しと生活リズム、発言、聞き方	健・人・心
6	10/5（月）	文化祭に向けて②	オンライン文化祭準備	小集団の話合い、自己選択・決定、 パワーポイント作成（個別）	健・人・心
7	10/12（月）	「働く①」	仕事をする意味を考えよう	ワークシート、相手の立場や考え、テブラ	心・人・コ
★	10/21（水）	特別講座	一人暮らしに向けて、生活費を考えてみよう	将来の自立や社会参加に必要な資質・能力	健・人・コ
★	10/25（日）	校内体験	さつまいも収穫体験①	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
★	10/27（火）	校内体験	さつまいも収穫体験②	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
8	10/26（月）	「働く②」	仕事をするとしたら	ワークシート 先輩の仕事、得意・不得意、自己理解、相談の仕方	人・コ・身
9	11/2（月）	「働く③」	いろいろな仕事、職業インタビュー練習	相手の立場、気持ち、質問の仕方、メモの取り方	心・環・コ
10	11/9（月）	「働く④」	職業インタビュー（校内４カ所訪問）	インタビュー本番、状況理解、場に応じた行動	心・コ・環
★	11/10（火）	余暇活動	サッカー大会	コミュニケーション、達成感	健・人・コ
★	11/29④	特別講座	学校と職場の違い、働く上で大切なことを学ぼう	職場のルールとマナー、外部講師	健・人・心
★	11/29⑤	特別講座	学校と職場の違い、働く上で大切なことを学ぼう	職場のルールとマナー、外部講師	健・人・心
11	11/30（月）	「働く⑤」	職業インタビュー振り返り	気付いたこと、感じたことの発表、パワーポイント	コ・心・身
12	12/7（月）	「伝える」	テーマに沿って発言、質問	場の状況理解と適切なコミュニケーション	心・人・コ
13	12/14（月）	1年間の振り返り	各自の発表（講座内小集団）	伝えるための話し方、他者との相互的やりとり、ワークシート、発表会準備、パワーポイント	心・人・コ
★	12/20（日）	発表会（合同）	パワーポイントでプレゼンテーション	場面にふさわしい表現方法、達成感、自己肯定感	人・心・コ

★体験活動等（校内・外）
★特別講座（校内）
★余暇活動

健：健康の保持　心：心理的な安定　人：人間関係の形成　環：環境の把握

身：身体の動き　コ：コミュニケーション

【学校設定科目（キャリア活動Ⅱｋ）木曜４限】

回	日付	単元	内容	ポイント	
★	7/2 （木）	校内体験	じゃがいも収穫体験	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
1	7/9 （木）	オリエンテーション	講座のテーマ、進め方、予定確認	居場所作り、見通し、スケジュール管理	健・人・心
2	7/16 （木）	キャリア活動とは	修悠館マイページについて オンラインミーティングについて zoomアプリのインストール	学習、生活リズム、聞き方、生徒の様子観察	健・人・心
3	7/23 （木）	オンライン・ミーティング練習	ジャガイモ収穫の振り返り zoom会議の練習（教室で）	機器の操作（PC、スマートフォン）、体験	人・コ・心
★	7/30 （木）	オンライン・ミーテイング（合同）	自宅（生徒）と学校	機器の操作、伝えたいこと、話し方、聞き方	心・コ・身
4	８・９	個人面談	前期の振り返り、後期に向けての確認	前期にできたこと（承認）、生徒の興味関心、体験希望の有無等	
★	8/6 （木）	校内体験	畑で整地体験	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
★	8/13 （木）	校外作業体験（合同）	食品製造、受注軽作業	福祉事業所（地域活動支援センター）体験、作業、５Ｓ、安全、公共交通利用	心・人・身
★	8/20 （木）	校内体験	畑で種まき体験	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
5	10/1 （木）	夏の振り返り 文化祭に向けて①	夏の出来事の発表 オンライン文化祭について	後期の見通しと生活リズム、発言、聞き方	健・人・心
6	10/8 （木）	他者理解	相手のサインを見つけよう。 価値観ゲーム	他者の意図や感情の理解、相手の意図を受け止め、自分の考えを伝える。	人・コ・心
7	10/15 （木）	お金について考える	悪徳商法について	機器の操作（PC）、体験、発言、聞き方	人・コ・心
★	10/21 （水）	特別講座	一人暮らしに向けて、生活費を考えてみよう	将来の自立や社会参加に必要な資質・能力	健・人・コ
★	10/25 （日）	校内体験	さつまいも収穫体験①	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
★	10/27 （火）	校内体験	さつまいも収穫体験②	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
★	10/25 （日）	校内作業（合同）	サツマイモ、大根収穫	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
8	10/29 （木）	自己理解	偏愛マップ作成	自分の長所、気持ちのコントロール	健・人・心
9	11/5 （木）	アンガーマネジメント	アンガーマネジメントゲーム	余暇、発言、聞き方、コミュニケーション	心・人・コ
★	11/10 （火）	余暇活動	サッカー大会	コミュニケーション、達成感	健・人・コ
10	11/12 （木）	怒りの対処法	怒りの対処法について考える 職場見学・清掃体験の選択	発言、聞き方、スケジュール管理	心・コ・環
★	11/18 （水）	職場見学	介護老人施設見学	施設の理解、質問の仕方、発言	コ・人・心
★	11/19 （木）	校内作業体験	清掃体験	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・ コ・環
11	11/26 （木）	「働く」	職場見学・清掃体験振り返り	気付いたこと、感じたことの発表、パワーポイント	コ・心・身
★	11/29 ④	特別講座	学校と職場の違い、働く上で大切なことを学ぼう	職場のルールとマナー、外部講師	健・人・心
★	11/29 ⑤	特別講座	学校と職場の違い、働く上で大切なことを学ぼう	職場のルールとマナー、外部講師	健・人・心
12	12/3 （木）	1年間の振り返り	各自の発表準備	伝えるための話し方、他者との相互的やりとり、パワーポイント	心・人・コ
13	12/10 （木）	1年間の振り返り	各自の発表準備	伝えるための話し方、他者との相互的やりとり、パワーポイント	心・人・コ
★	12/20 （日）	発表会（合同）	パワーポイントでプレゼンテーション	場面にふさわしい表現方法、達成感、自己肯定感	人・心・コ

【通級による指導（キャリア・ポート①）日曜４・５限】

回	日付	単元	内容	ポイント	
★	6/14（日）	体験	オンライン・ミーティング練習 zoom会議について、zoomアプリのインストール	生活リズム、発言、聞き方、生徒の様子観察	健・人・心
★	6/21（日）	体験	オンライン・ミーティング 生活状況把握、今後の活動について	機器の操作、伝えたいこと、話し方、聞き方	心・コ・身
★	7/2（木）	校内体験	じゃがいも収穫体験	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
1	7/5④	キャリア・ポートとは？	顔合わせ、オリエンテーション 講座のテーマ、進め方、予定確認	居場所作り、見通し、生徒の様子観察	健・人・心
2	7/5⑤	オンライン・ミーティングを振り返ろう	ミーティングについて意見交換 １年間の目標設定	居場所作り、見通し、生徒の様子観察	健・人・心
3	7/19④	働く意義を考える	「働く」ことについて考える。 身近なものから仕事について考える。	職業観、考察、コミュニケーション	心・人・コ
4	7/19⑤	自分の得意なことを探してみよう。	自分の長所や得意なことを知る。 がんばらなくてもできることを考える。	自己理解、考察	心・人・コ
5	８・９	個人面談	前期の振り返り、後期に向けての確認	前期にできたこと（承認）、生徒の興味関心、体験希望の有無等	
★	8/6（木）	校内体験	畑で整地体験	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
★	８/14（金）	施設見学	タイピング等の体験	福祉事業所（就労移行事業所）体験、作業 公共交通利用	心・人・身
★	8/20（木）	校内体験	畑で種まき体験	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
6	９/27④	夏の振り返り 文化祭に向けて①	夏の出来事を発表する	後期の見通しと生活リズム、発言、聞き方	健・人・心
7	９/27⑤	文化祭に参加しよう	自分の視覚認知を知る。 価値観ゲーム	小集団の話合い、自己選択・決定、 パワーポイント作成（個別）	健・人・心
8	10/11④	お金の使い方を考えよう。	機器の操作（PC）、体験、発言、聞き方	コミュニケーション、考察、話し方	心・人・コ
9	10/11⑤	PC入力練習	タイピング練習	作業、コミュニケーション	人・身・コ
★	10/21（水）	特別講座	一人暮らしに向けて、生活費を考えてみよう	将来の自立や社会参加に必要な資質・能力	健・人・コ
★	10/25（日）	校内体験	さつまいも収穫体験①	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
★	10/27（火）	校内体験	さつまいも収穫体験②	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
10	11/１④	「報告」の方法を考えよう	コミュニケーション講座	適切な行動、話し方、集団参加、生徒の様子観察	心・コ・人
11	11/１⑤	「報告」の方法を考えよう	コミュニケーション講座	適切な行動、話し方、集団参加、生徒の様子観察	心・コ・人
★	11/10（火）	余暇活動	サッカー大会	コミュニケーション、達成感	健・人・コ
12	11/15④	「断り方」を身に付けよう	コミュニケーション講座	適切な行動、意思の伝達、集団参加、生徒の様子観察	心・コ・人
13	11/15⑤	ソーシャルスキル・アルバムを作ろう	コミュニケーション講座	適切な行動、意思の伝達、集団参加、生徒の様子観察	心・コ・人
★	11/19（木）	校内作業体験	清掃体験	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ・環
★	11/18（水）	職場見学	介護老人施設見学	施設の理解、質問の仕方、発言	コ・人・心
14★	11/29④	特別講座	学校と職場の違い、働く上で大切なことを学ぼう	職場のルールとマナー、外部講師	健・人・心
15★	11/29⑤	特別講座	学校と職場の違い、働く上で大切なことを学ぼう	職場のルールとマナー、外部講師	健・人・心
16	12/13④	１年間の振り返り	各自の発表（講座内小集団）	伝えるための話し方、他者との相互的やりとり、ワークシート、発表会準備、パワーポイント	心・人・コ
17	12/13⑤	発表会の準備	伝えるための話し方、他者との相互的やりとり、パワーポイント	伝えるための話し方、他者との相互的やりとり、ワークシート、発表会準備、パワーポイント	心・人・コ
18★	12/20（日）	キャリア活動発表会	パワーポイントでプレゼンテーション	場面にふさわしい表現方法、達成感、自己肯定感	人・心・コ

【通級による指導（キャリア・ポート②）日曜４・５限】

回	日付	単元	内容	ポイント	
★	6/14（日）	体験	オンライン・ミーティング練習 zoom会議について、zoomアプリのインストール	生活リズム、発言、聞き方、生徒の様子観察	健・人・心
★	6/21（日）	体験	オンライン・ミーティング 生活状況把握、今後の活動について	機器の操作、伝えたいこと、話し方、聞き方	心・コ・身
★	7/2（木）	校内体験	じゃがいも収穫体験（生徒Ａ参加）	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
1	7/5④	キャリア・ポートとは？	顔合わせ、オリエンテーション 講座のテーマ、進め方、予定確認	居場所作り、見通し、生徒の様子観察	健・人・心
2	7/5⑤	オンライン・ミーティングを振り返ろう	ミーティングについて意見交換 １年間の目標設定	居場所作り、見通し、生徒の様子観察	健・人・心
3	7/19④	前期の振り返り 夏の計画	新しい小集団グループでの活動	他者との関わり 自分の気持ちや考えの表出	心・人・コ
4	7/19⑤	校外学習事前学習	見学先について、当日の予定	福祉サービス、制度の利用 持ち物、時間、スケジュールの管理	心・人・コ
5	８・９	個人面談	前期の振り返り、後期に向けての確認	前期にできたこと（承認）、生徒の興味関心、体験希望の有無等	
★	８/14（金）	施設見学と体験	タイピング等の体験	就労移行事業所）体験、作業 公共交通利用	心・人・身
6	９/27④	校外学習事後学習	体験・気づいたことの発表	後期の見通し、発言、聞き方 困った時の対処の仕方、	健・人・心
7	９/27⑤	文化祭に参加しよう	パワーポイント作成（個別）	小集団の話合い、自己選択・決定	人・心・コ
8	10/11④	職業準備性①	職業準備性ピラミッド	将来働くために、自分らしい働き方 インターンシップについて	心・人・コ
9	10/11⑤	職業準備性①	健康管理と日常生活管理	自己理解、得意・不得意、生活リズム	健・心・コ
★	10/21（水）	特別講座	一人暮らしに向けて、生活費を考えてみよう（生徒Ｄ参加）	将来の自立や社会参加に必要な資質・能力	健・人・コ
★	10/25（日）	校内体験	さつまいも収穫体験① （生徒Ａ参加）	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
★	10/27（火）	校内体験	さつまいも収穫体験②	作業手順理解、道具の使用、安全について	健・身・コ
10	11/１④	職業準備性②	社会生活能力・対人技能	意思表示、周囲との関係作り、援助依頼	心・コ・人
11	11/１⑤	職業準備性②	社会生活能力・対人技能	感情コントロール、ストレスについて セルフケア、ワークシート	心・コ・人
★	11/10（火）	余暇活動	サッカー大会	コミュニケーション、達成感	健・人・コ
12	11/15④	職業準備性③	基本的労働習慣	従業員（スーパーマーケット）向けビデオ ワークシート	心・コ・人
13	11/15⑤	職業準備性③	基本的労働習慣	職場のルールとマナー 状況に応じた社会性・コミュニケーション	心・コ・人
14★	11/29④	特別講座	学校と職場の違い、働く上で大切なことを学ぼう	職場のルールとマナー、外部講師	健・人・心
15★	11/29⑤	特別講座	学校と職場の違い、働く上で大切なことを学ぼう	職場のルールとマナー、外部講師	健・人・心
16	12/13④	１年間の振り返り	各自の発表（講座内小集団）	他者との相互的やりとり、ワークシート、	心・人・コ
17	12/13⑤	発表会の準備	発表会準備、パワーポイント	発表の仕方伝えるための話し方、 ワークシート	心・人・コ
18★	12/20（日）	キャリア活動発表会	パワーポイントでプレゼンテーション	場面にふさわしい表現方法、達成感、自己肯定感	人・心・コ

☆	９/８～	福祉事業所体験	就労移行支援事業所（４日間）	個別体験と巡回指導 （見学、事前面接、事前事後指導を含む）	生徒Ａ
☆	10/12～	福祉事業所体験	就労移行支援事業所（３日間）	個別体験と巡回指導 （見学、事前面接、事前事後指導を含む）	生徒Ｂ
☆	11/24～	福祉事業所体験	就労移行支援事業所（４日間）	個別体験と巡回指導 （見学、事前面接、事前事後指導を含む）	生徒Ｂ
☆	10/19～	福祉事業所体験	就労移行支援事業所（５日間）	個別体験と巡回指導 （見学、事前面接、事前事後指導を含む）	生徒Ｃ
☆	2/8～	福祉事業所見学	自立訓練事業所 就労移行支援事業所	個別見学	生徒Ｄ

気持ちをほぐそう

（ⅱ）令和２年度の指導例

11月1日（日）　氏名：

キャリア・ポート

今日のテーマ『報告する』

報告は、職場（学校）で　①作業を終了したとき、②作業でミスしたとき、③作業で何か不具合が生じた時などに行うものです。
報告を確実に行うと、上司（先生）が作業（学習）の進捗状況を把握でき、あなたも次の指示を受けたり、助言を得ることができます。
このように報告は、職場（学校）で作業を行ううえで、とても大切なコミュニケーションの１つです。
今回は、この報告の方法を考えてみましょう。

報告の方法

■　作業（学習）がすんだら、**すぐに報告し、次の指示を仰ぐ**こと。
■　上司（先生）に報告するときは、**「今、よろしいでしょうか」と確認する**こと。
■　報告は、**結論をまず先に述べ、正確かつ簡潔に伝える**こと。
□　５ＷＩＨ（いつ、どこで、だれが、何を、なぜ、どのように）を参考に**具体的に報告する**こと。
□　ミスやトラブルが発生した時には、**すぐに報告し、指示を仰ぐ**こと。

※今日は、■を練習しましょう。（ポイント）

（参考）作業の一連の流れ

① 指示を受け、作業内容を理解する。
（指示内容が不明な際は質問する。）

② 作業を行う。
（作業を行う中、不明点等を質問する。）

③ 報告し、次の指示を仰ぐ。

1　先生が行ったロールプレイについて、自分の意見や、出された意見を記入しよう。

★気付いた点、工夫するとさらに良くなる点

2　このロールプレイで注意することを記入しよう。

3　今日のテーマについて、どのような場面で使ってみたいですか。

11月15日（日）　氏名：

キャリア・ポート

今日のテーマ『断る』

職場では、すぐに対応しなければならない案件が発生し、残業等を頼まれることがあります。働き始めたばかりの人にとっては、疲労を溜めないように自己管理を行う必要があります。よって、周りが忙しそうに働いているからなどの理由で残業を上手く断れないと、体調の悪化につながってしまうこともあります。

残業を上手に断るスキルを身に付けることは、とても大切なコミュニケーションの1つです。

今回は、この残業（頼みごと）を断る方法を考えてみましょう。

「断る」方法

- ■ はっきりと断る。
- ■ 残業できない理由（体調が万全ではない等）を簡潔に話す。
- ■ 申し訳ないという気持ちを言葉と非言語表現で上手く伝える。
- □ 業務時間内に手伝う等の代替案を伝える。
- □ 依頼者側の立場を考えて妥協点を見つける。
- □ 「断る＝相手に悪く思われる」と考えるのではなく、自分にも「No」といえる権利があり、断ることは相手を拒否することではないことを確認する。

※今日は、■を練習しましょう。（ポイント）

1　先生が行ったロールプレイをよく見て、気づいた点などをメモしよう。

★気付いた点、工夫するとさらに良くなる点

☆他の人の意見

2　「残業（頼みごと）を断る」ことについて、考えてみよう。

★ホワイトボードにまとめますので、意見を出し合いましょう。

3　練習してみよう。

★先生が上司役になります。皆さんも練習してみましょう。

4　振り返り

（1）うまくできたことは何か。

（2）どのようなアドバイスを受けたか。

5　ソーシャル・スキル・アルバムを作ろう。

○テーマ「友人関係を築き、維持すること」
①初めて会う人との接し方、②相手が校則（規則）違反をしていた場合の接し方

○プレゼンテーションソフトを使って作成してみよう。
☆資料を参考にして、写真や吹き出しを入れてみよう。

４・５校時

目標（ターゲット　スキル）

①「適切な行動を行うための手がかりを見つける（心）」

②「場や状況に応じた話し方を身に付ける（コ）」

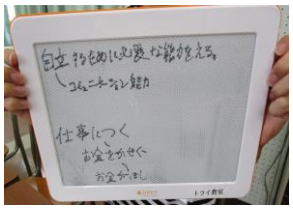
③「集団に参加するための手順や決まりを理解する（人）」

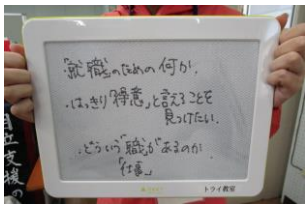
内容

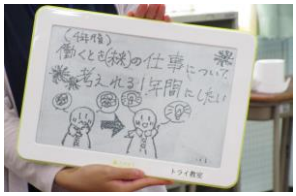
①「報告」の方法を考えよう。
②みんなで疑問や不安を話し合おう。

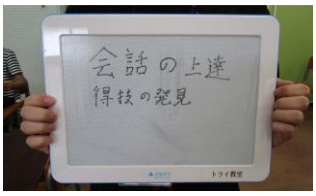
（ⅲ）教室での指導

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、前期の活動は非常に制限されることになった。７月、講者が集まって指導を受けることが可能となった。初回は、「キャリア・ポート」の名前の由来を紹介しながら、ガイダンス及び「キャリアとは何か」を理解させる内容で指導を行った。それを踏まえて、生徒個々が１年間の目標を考えた。生徒は、通級指導の目的を理解し、自分なりの目標を立てることができた。









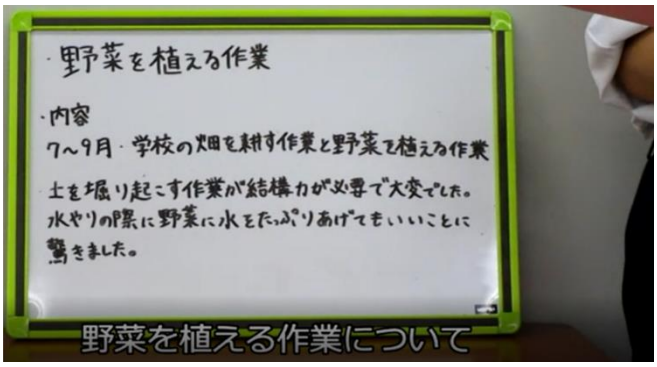
（ⅳ）農業体験プログラムの実践

体験活動の一環として、また生徒の実態把握を行う方法の１つとして農業体験活動を実施した。畑の整地、種まき、収穫作業により、教室では見られない生徒の新たな一面を発見することができた。

学校内の敷地に畑を作り、４月にじゃがいもを植えておき、７月に収穫を体験させること

とした。今年度は、教室での指導を行う前のプレイベントとして実施した。収穫する楽しさを味わった生徒たちの表情は非常に明るかった。収穫体験全体を通して、生徒個々の様々な特徴を把握することができた。同一の作業でも、生徒の反応は実に様々であり、教室外で活動することで、教室内では見ることができない生徒の新たな一面を発見することができ、非常に有意義であることがわかった。

収穫後に行った学習活動では、育てたい野菜をテーマにした発表を行い、自分が新たに認知や行動を進めていくために活用しようとする態度を高めたうえで、畑の整地作業や種まきを行った。生徒の関心度によっては、農業体験を柱にした通級指導を１つのコースとして実施することも可能であると考える。



（ｖ）就労を意識した校外体験活動

就労や社会参加を意識した就労移行支援事業所の見学、地域作業所における作業体験、職場見学等を企画した。

コロナ禍においても事業所や地域作業所、近隣施設の協力を得て、見学や体験活動を行った。卒業後の進路を考えるうえで、様々な関係機関における校外での活動を体験させることは不可欠である。また、教室での指導では、毎回校外活動を意識し、挨拶や言葉遣い等の練習を行った。校外活動は、それが般化しているかを見取る機会ともなっている。加えて、時間を守って適切に行動する、指示通りに作業を行う等の大切さも身を持って体験できる機会であった。

（vi）地域資源（行政及び福祉）と連携したプログラム

本校の所在地である横浜市泉区の区役所と連携し、横浜市の生活改善支援員を講師として、特別講座を実施した。生徒には自立した生活を想像させ、生活するにはどの位のお金が必要かを、考えさせた。地域との連携は、生徒が校外に出ていく活動になりがちだが、今回は教室で行ったため、生徒は、安心して取り組むことができた。教員の指導だけでなく、関係機関と連携し、要点を絞った専門的かつ具体的な取組を行うことができた。

また、就労移行支援事業所の職員を招き、「学校と職場の違い」についての特別講座も実施した。生徒は、自立訓練事業所で行っているプログラムを体験することで、「生徒」としての立場と「社員」としての立場の違いを、現在の自分の状況と照らし合わせ、将来設計（キャリア）について学びを深めることができた。

② コロナ禍における新たな取組の創出

新型コロナウイルス感染症対策により、前期の活動が非常に制限される中、通級指導の可能性を広げる試みとしてオンラインによる活動に取り組んだ。社会全体が外出を控え、在宅勤務やオンライン授業等の実施が求められるようになってきたことに鑑み、生徒は自宅、教員は学校からオンラインによるミーティングを実施した。

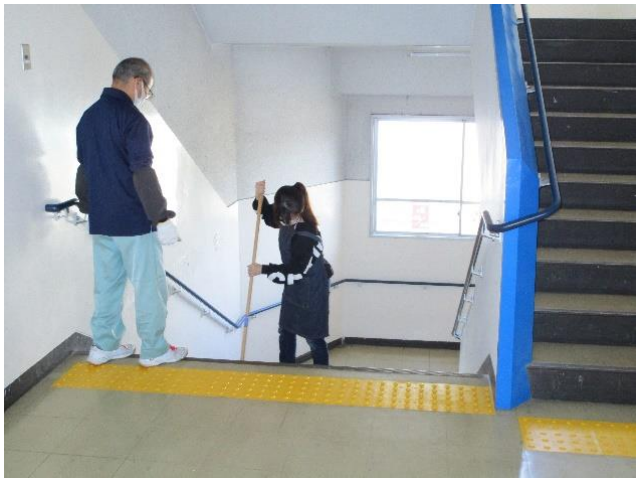
生徒はコミュニケーションを行うことが苦手で、且つ初めてのオンライン活動の体験であったこともあり、指導側も大変緊張した。しかし、生徒は指導側の質問に対して非常に多くの答えを返すことができ、予想に反して生徒が活発に発言をしたことが非常に驚きであった。この取組は、生徒一人ひとりの自己表現力を引き出せるツールとして有効だということがわかった。

③　令和２年度の取組の様子

【アンガーマネジメントを学ぶ】

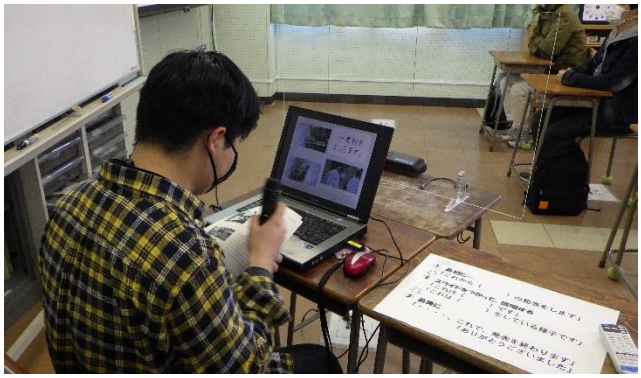
【サッカー大会】

【構内作業体験（清掃）】



【職業インタビュー】

【学習発表会】



④　他校通級実施に関する取組

（ｉ）　令和２年度の通級指導について

今年度は、昨年度末の神奈川県教育委員会主催の他校通級検討委員会において決定した１名を受け入れ、自校通級の生徒 23 名（平日 15 名、日曜８名）と共に活動を行った。その後、他校の新入生についても検討委員会を経て受け入れを決定し、９月末より１名が加わった。

他校通級の生徒については、次のような流れで受け入れを決定した。まず、自校、他校に関わらず本人及び保護者が納得して通級指導を受けることができるように希望者

には、必ず実際の指導を見学してもらうようにした。受講を希望する場合には、神奈川県教育委員会が指定する様式と、支援シート（個別の支援計画）を神奈川県教育委員会高校教育課に提出する。他校通級検討委員会で受け入れが決定した後、通級担当者から在籍校の担当者又は担任に必要な書類（(ｱ)、(ｲ)）を配付し、受講説明会の日程を伝えた。

(ｱ) きめ細かな指導を行うためのアンケート【資料１】

【通級校→在籍校→本人・保護者→通級校】

(ｲ) 年間教育計画、健康調査票の写し、生徒カードの写し　【在籍校→通級校】

受講説明会に前後して、通級担当者は、本校で受講する上での注意点や、通級指導に関するスケジュール、情報共有の方法等を電子メールや電話で在籍校の担当者に連絡した。指導開始後も通級指導の様子や、在籍校での様子をお互い伝え合うよう心がけた。

令和２年６月 21 日
横浜修悠館高等学校

「横浜修悠館高等学校他校通級」における指導開始までの流れについて

	流れ	内容	対象	日程（期間）
受講者決定までの流れ	① 通級見学会参加	希望生徒は定められた期間にスクーリング見学を行う 生徒→修悠館	新入生	6月8日(月)～7月 19 日(日) ※7月 5 日、7月 19 日
	② 見学者報告	修悠館高校から高校教育課へ見学者報告 修悠館教頭→高校教育課指導主事	新入生	7 月 20 日(月)
	③ 希望票の提出	「通級による指導（他校通級）希望票」「個別の教育支援計画」を在籍校から高校教育課へ提出 在籍高校→高校教育課	新入生	8月6日(木)締切
	④ 他校通級検討委員会	高校教育課 総合教育センター（亀井野） 横浜修悠館高校 3 者の組織で検討	新入生	8 月 11 日(火)
	⑤ 決定通知	高校教育課から在籍校へ選考結果を通知 高校教育課→在籍校	新入生	8 月 12 日(水)
	⑥在籍校へ連絡	修悠館高校管理職から在籍校管理職へ今後の流れについて連絡 修悠館教頭→在籍校教頭	新入生	8 月 13 日(木)
通級開始までの流れ	⑦ 受講者の現状把握	修悠館高校担当から在籍校担任（または在籍校教育相談 Co）へ実態聞取り（電話による聞取り又は書面） 修悠館担当→在籍担任　個別の指導計画作成	新入生	9 月3日(木)まで
	⑧ 受講説明会	・修悠館高校から受講に関する説明 ・諸注意個別の指導計画作成のための面談等 修悠館⇔生徒・保護者	新入生	9 月6日(日)
	⑨ 個別の指導計画確認（合意形成）	修悠館高校担当が在籍校で、在籍校教育相談 Co、担任、生徒及び保護者と面談 修悠館担当⇔在籍校担当・生徒・保護者 個別の指導計画確定	新入生	9 月 14 日(月)～9 月 17 日(木)
	⑩ 通級開始	受講開始 生徒	新入生	9月 27 日(日)

他校から生徒を受け入れるに当たり、実態把握をした上で、生徒の特性を理解するために、本人・保護者と面談を行い、在籍校の担任や教育相談コーディネーターなどからも情報を聞き取った。また、講座での様子を本校担当者が「キャリア・ポート（他校通級）学習の記録」【資料２】に記入し、生徒経由で保護者に渡るようにした。

（ⅱ） 他校通級における巡回訪問の重要性

他校通級を受ける生徒の在籍校へ巡回訪問を行い、生徒の普段の学校生活や授業への取組状況、教室内の様子を見学した。その後の情報共有では、担任が当該生徒に対する気になる点や指導上の困り感、効果的な配慮事項等が話題となった。今回は、通級担当者と在籍校の教育相談コーディネーター（特別支援教育コーディネーター）、担任の三者で情報共有を行い、互いの立場で話をすることができた。その結果、特に担任が抱く指導上の困り感について、三者が指導・支援の役割を分担することで生徒の教育的ニーズに応じた支援を行うということの確認ができたことが非常に意義深いことであると感じた。通級指導を受ける生徒が多くの時間を過ごす通常の学級において学習上、生活上の困難の改善・克服を目ざすことが通級の目的であることから、指導・支援の分担によって効果が高まることが期待できる。

他校通級においては、在籍校へ巡回訪問に行き、在籍校の教育相談コーディネーターや担任と、生徒の教育的ニーズについて情報共有できたことや、生徒に対する指導・支援策を双方で役割分担できたことは大きな成果であり、在籍校との情報共有やコンサルテーションの必要性は通級指導を行う上で、大変重要であることがわかった。

（３） 事業終了に当たり

通常の学級に在籍する障がいのある児童生徒のうち、教室環境を整備したり、支援機器を用いたり、教材・教具を工夫したりするだけでは、落ち着いて学校生活を過ごしたり、学力の定着につながることが難しい生徒がいる。そのような生徒に対して、各教科の指導の他に、学習上や生活上の困難を改善し、克服することを目的に、障がいに応じた特別の指導を「通級指導教室」といった特別な場で受ける指導形態が通級による指導である。通級による指導は、日頃の学習場面や生活場面で生じているつまずきや困難を取り上げ、指導目標や指導内容が検討されていくものである。よって、日頃の様子をよく知る担任や各教科等の担当者の情報は不可欠である。さらに、通級による指導の成果が、通常の学級での学習場面や生活場面でも発揮されていくように、通常の学級担任及び各教科等の担当と通級担当者の連携・協力は非常に大切である。

一方、他校通級に関しては実施１年目であり、受け入れた人数も少ない。今回は、在籍校との綿密な連絡調整ができたが、今後自校通級を含めて希望者が増えたときに人材の確保が不可欠である。特に今年度は、コロナ禍において多くの高等学校では登校日が減少し、生徒の困り感が顕在化していない部分もあり、通常の登校日数や学校行事の開催とな

れば、その中で新しい課題が生まれ、通級指導を希望する生徒が増えることが予想される。

また、講座の中で新たな取組を行うことができたが、今後は、通級担当者だけではなく学校全体の取組として、指導の進め方や教材の活用法、関係機関との連携の仕方等のノウハウをどのように継承していくかも課題として残っている。

（４）　今後に向けて

①　講座の発展

普段の講座の中から、オンライン講座の有効的な活用方法をさらに模索する必要がある。登校が制限された場合や体調不良により登校が難しい場合など様々な生徒に対応するための代替手段として活用することができる。また活動内容とオンラインとの相性を理解することで活動の幅が広がることが期待できる。体験活動については、地域資源（行政・福祉）である学校外の施設・機関と連携することで、卒業後の進路を意識させるとともに、生徒個々の興味・関心や希望進路興味・進路に応じた幅広い選択肢を提示できるよう連携先を増やしていきたい。

講座担当者の問題については、これまでのノウハウの継承と共に新しい視点による講座の発展を進めていくために、校内での研修や学習会など、講座を担当していない職員や、新着任の職員に対しての情報発信を進めていく必要がある。

②　エビデンスに基づく指導目標・指導内容の設定

学習上又は生活上の困難を対処療法的に１つずつ指導していくことにも限界がある。個々の生徒の障がいによる学習上又は生活上のつまずきや困難を把握しながら、背景にある要因を整理し、また他の学習場面や生活場面で見られる困難との関係はどうなのかなどを分析し、生徒が何を身に付ければ、学習場面や生活場面で見られる様々な困難が改善・克服されるかを考え指導目標や指導内容を設定していくことを目ざしたい。そのためには、特別支援学校学習指導要領に示されている自立活動の６領域に基づいた実態把握を行い、指導計画を作成することが必要である。自立活動は、児童生徒等の心身の調和的発達の基盤を培うことをねらいとして指導するものであり、自立活動の指導が生活や各教科等において育まれる資質・能力を支える役割を担っている。自立活動の指導を着実に実施することができれば、個に応じた指導の充実につなげることができる。

③　在籍校との情報共有

通級指導を受ける生徒が多くの時間を過ごす通常の学級における学習上、生活上の困難の改善・克服を目指すことが通級の目的であることから、指導・支援を分担することによって効果の高まりが期待できる。そのためには、在籍校との相互訪問や情報共有の機会を増やすことが更に必要となる。また、他校通級においても教育課程の編成及び単位の認定は在籍する学校が行うことになる。教育課程の編成及び単位の認定にあたっては、指導目標や指導内容、指導時間数等の情報が必要となり、在籍する学校と通級先の学校との連携は必要不可欠である。個人情報に該当する内容も一部取り扱うことから、情報提供の内容や方法については、管理職とも事前に確認しておくことが欠かせない。

④　関係機関との情報共有

指導の継続性の面から出身中学校との情報共有もできると指導に活かすことができると考える。今回、本校で他校通級を受けている生徒が、中学時代に通級を受けていた学校（他校通級）に指導内容や変容等の情報提供をお願いしたところ、個人情報保護の観点から個人の指導記録を共有することができなかった。中学校との情報の引き継ぎは「切れ目のない支援」の必要性からも大切なポイントであると捉えていたが、生徒情報に関する連携のあり方には課題が残った。今後は中学校とも連携を深めていく方策がさらに必要であると思われる。

また、通級指導を受ける生徒は、既に医療機関や相談機関とつながっていることが多く、方針の統一化を図るために、このような機関とも情報共有していきたい。その他、神奈川県総合教育センター、障害者支援センター等行政機関とのさらなる連携や、県内の自校通級を実施している県立高等学校３校との情報共有の場も必要であると考える。

⑤　特別支援学校のセンター的機能の活用

自立活動の指導は、特別支援学校に実践の蓄積がある。通級指導に関する疑問点等は、特別支援学校のセンター的機能などを活用しながら、個別の指導計画の作成や自立活動の指導に関するノウハウについて、助言を受けていきたい。

⑥　県内の高等学校への情報発信

他校通級の指導を受けるためには事前に本校の見学が必須であるため、今回は講座の回数も限られていた影響もあってか、見学者は少なかった。高等学校における通級による指導がどのようなものなのか、高校教員の認知度を上げるための情報発信が重要だと考える。文部科学省の調査でも明らかなように、教育的ニーズを持つ生徒は、どの学校にも一定程度在籍している。発達障がい等により困難を抱える生徒に通級指導という特別な教育の機会があるという情報を届ける情報発信の方法を神奈川県教育委員会と協力し更に検討していきたい。

⑦　通級指導の改善に向けて（自立活動の指導の充実―新型コロナウイルス感染症拡大状況下での自立活動の意義と指導の工夫―　特別支援教育 2020 冬 No.80 より抜粋）

特別支援学校学習指導要領第７章の３「個々の児童又は生徒に対し、自己選択・自己決定する機会を設けることによって、思考・判断・表現する力を高めることができるような指導内容を取り上げること」が新設された。生徒が指導目標を自覚し、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための方法等について、自ら選んだり、ものごとを決定して実行したりすることは、学びを深め、確実な習得を図ることにつながることにもなる。

更に、「個々の児童又は生徒が、自立活動における学習の意味を将来の自立や社会参加に必要な資質・能力との関係において理解し、取り組めるような指導内容を取り上げること」も新設事項である。障害のある生徒が自立し、社会参加するには、各教科等で学ぶ知識や技能等の他に、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する力を身に付けていく必要がある。そうした困難に対応する力を生徒が主体的に学べる機会が自立活動の指導である。したがって、自立活動での学習が、将来の自分の自立や社会参加にどのように結びついていくのか、児童生徒が自らその関係を理解して学習に取り組む

ことができるよう、児童生徒の発達の段階を踏まえてこのような指導内容を段階的に設定することが重要である。自立活動を学習することの意味に自ら気づき、目的意識を持って主体的に学習に取組む力を高めることは、将来の自立と社会参加を実現する上で非常に重要である。

自立活動は、生徒等に生きる力を育むための基盤を培う役割を担っている。その取組みがコロナ禍においても自立活動の実施や指導の充実を支えている。

【資料1】

他校通級希望者の皆さんへ

神奈川県立横浜修悠館高等学校長

きめ細かな支援を行うためのお願い

本校で通級指導を受けるにあたり、個に応じたきめ細かな支援を行う際の参考にするため、**次の項目に当てはまることがありましたら、可能な範囲でご記入のうえ、他の書類と一緒に提出してください。該当しないところについては空欄でかまいません。**ご提出いただいた情報は、厳重に管理し、支援目的以外で使用することはありません。また、記入による不利益は生じません。

問合せ
教育相談・学習支援グループ ○○・△△
電話（○○○）●●●－××××

氏名		連絡先（TEL）	

（1）学校生活について

1～12 の当てはまるところの記入欄に ○ を書き入れてください。

		記入欄
1	黒板の字をノートに写したり、漢字を書いたりするのが苦手である。	
2	教科によって成績に極端なバラツキがある。	
3	課題の提出をよく忘れる。	
4	一斉の指示が理解できず、何をしていいかわからないことがある。	
5	整理整頓が苦手で、プリント等の配付物をなくしてしまう。	
6	思いつくままに話すなど、筋道の通った話をするのが苦手である。	
7	相手の反応に関係なく、自分の興味のあることを話し続けることがある。	
8	言動が誤解されやすく、クラスメートとのトラブルが多い。	
9	順番を待つのが難しい。	
10	落ち着きがないことが多い。（そわそわしていたり、思いついて急に席を立ったりする）	
11	カッとなりやすく、感情のコントロールができなくなることがある。	
12	手先が不器用だったり、運動がぎこちなかったりすることがある。	
13	＊その他、これまでの学校生活で「困ったこと」がありましたらお書きください。	

（2）これまでの支援について

ア あてはまる方に○をつけてください。

a 特別な支援や相談機関等を利用したことがある。→ **イ** に続きます

b 特別な支援や相談機関等は利用したことがない。→ **（3）**へお進みください

裏へ

イ アでaに○をつけた方は、次の①～④について、ご記入ください。

①これまで以下のような支援等を受けたことのある方は、受けた項目と、(　　)の時期に〇をつけてください。(複数可)　※「高」は、在籍している高等学校が対象です。

ア)特別支援学級・個別級(小 中)	イ)通級による指導 (小 中 高)
ウ)別室(保健室等)登校(小 中 高)	エ)家庭への訪問指導(小 中 高)
オ)特別支援学校(学校名　　小 中 高)	
カ)その他(小 中 高)※内容を具体的に(　　)	

②これまで以下のような特別な配慮を受けたことのある方は、受けた項目と、(　　)内の時期に〇をつけてください。(複数可)　※「高」は、在籍している高等学校が対象です。

ア)介助員(小 中 高)
イ)授業への保護者の同席(小 中 高)
ウ)ノートをとるための授業中のパソコン等使用許可等(小 中 高)
エ)定期試験の別室受験(小 中 高)
オ)その他(小 中 高)※具体的に(　　)

③総合教育センターなどの相談機関を利用したことのある方は、あてはまる相談機関に〇をつけるとともに、その時期を(　　)に記入してください。(複数可)

ア)総合教育センター　(　　)
イ)地域療育センター　(　　)
ウ)特別支援教育総合センター　(　　)
エ)発達障害者支援センター(発達相談室)　(　　)
オ)その他(具体的にご記入ください)　(　　)

④その他の支援等を受けたことのある方は、受けた項目に〇をつけてください。(複数可)

ア)ことばの教室　イ)適応指導教室　ウ)フリースペース　エ)親の会(訓練会)
オ)精神科デイケア　カ)放課後等デイサービス
キ)その他(具体的にご記入ください)(　　)

(3)当てはまる場合には、(　)に〇をつけ、【 】内の該当するものにも〇をつけてください。

(　)障害者手帳を所持している　【 身体 ・ 療育 ・ 精神 ： 等級(　　)】
(　)発達障害等の診断を受けている　【ASD・ADHD・LD (　　)】
(　)個別の支援計画(支援シート)を持っている

「自立支援の会」

本校では、発達障害も含め、特別な支援を必要とする生徒の「自立と社会参加」を目指した支援に取り組んでいます。「自立支援の会」では保護者対象に、次のような活動を行っています。

活動内容：①企業・職業訓練機関・福祉事業所等の見学会
②支援機関・制度の利用などについての学習会や情報提供
③必要に応じて、個別の支援計画に基づく支援

※関心のある方、登録を希望する保護者の方は、次へご記入ください。

保護者氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご連絡先電話番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【資料2】

令和２年度　キャリア・ポート（他校通級）　学習の記録

神奈川県立横浜修悠館高等学校

		日付	●月●日（●）
生徒	神奈川県立●●高等学校●年	●●　●●	
４校時	「働く」ことについて考えよう。		
５校時	自分の長所や得意なことを探してみよう。		

【通級担当者より】
・（例）今回の目標　①気持ちを切り替える方法を考える。（心）
②自分の良い面を理解する。（環）

記載者　神奈川県立横浜修悠館高等学校　●●　●●

【在籍校担当より】

記載者　神奈川県立●●高等学校　●●　●●

【保護者より】

記載者　●●　●●

【参考書籍】

書籍名	編者	出版社
マンガでわかる発達障害特性&個性発見ガイド	福西勇夫	法研
障害に応じた通級による指導の手引 解説とＱ＆Ａ 改訂第３版	文部科学省	
実践！通級による指導　発達障害等のある児童のためにできること	山中ともえ	東洋館出版社
発達支援をつなぐ地域の仕組み―糸賀一雄の遺志を継ぐ滋賀県湖南市の実践	湖南市糸賀一雄生誕１００年記念事業実行委員会	ミネルヴァ書房
わかりやすい　発達障がい・知的障がいのＳＳＴ実践マニュアル	瀧本優子、吉田悦規	中央法規
全国の特色ある３０校の実践事例集　「通級による指導」編	柘植雅義、小林玄、飯島知子 鳴海正也	ジアース教育新社
新版　「特別支援学級」と「通級による指導」ハンドブック	全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会	東洋館出版社
写真で教えるソーシャル・スキル・アルバム　〈青年期編〉―自閉症のある人に教えるコミュニケーション、交友関係、学校・職場での対応	ジェド・ベイカー	明石書店
小学館の子ども図鑑　プレ NEO　楽しく遊ぶ学ぶ　せいかつの図鑑	小学館	小学館
特別支援教育　改訂指導要録記入の実際と文例集	池田芳和、横倉久	明治図書
発達障害の人が働くときに知っておきたい 10 の基本	宮尾益知	河出書房新社
小学校・中学校　通常の学級の先生のための手引書 ー通級による指導を通常の学級での指導に生かすー	独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所	ジアース教育新社
個別の指導計画作成ハンドブック　ＬＤ等、学習のつまずきへのハイクオリティーな支援	海津亜希子	日本文化社
個別の指導計画作成と評価ハンドブック―学習障害（ＬＤ）のある小学生・中学生・高校生を支援する	海津亜希子	教育ジャーナル選書
自立活動の視点に基づく　高校通級指導プログラム	小関　俊祐、髙田久美子 嶋田　洋徳	金子書房
特別支援教育　2020 冬 No.80	文部科学省	東洋館出版社

【参考資料】

・文部科学省

「初めて通級による指導を担当する教師のためのガイド」

・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

高等学校教員のための「通級による指導」ガイドブック

・独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構・障害者総合センター職業センター

発達障害者のワークシステム・サポートプログラム

問題解決技能トレーニング

発達障害者のための職場対人技能トレーニング（ＪＳＴ）

２　２班（ＩＣＴを活用した多様な学習指導）

調査研究にあたっては、「動画コンテンツの活用や『ＩＴ講座』などの多様な学習支援の検討」及び「ＩＣＴを活用した指導実践例が生徒の社会的自立につながる事例を、書籍などを活用して検証しまとめる」ことを主眼とした。

昨年度に引き続き、【動画コンテンツとＩＣＴ活用】【ＩＴレポート】【Classi】の３つの柱を中心に、また昨年度から本校に導入されたＢＹＯＤ回線やChromebookの利活用についても併せて研究対象に加え、様々な困難を抱えた生徒の多様な学習ニーズに応えられるよう、ＩＣＴを活用した幅広い学びの体制の構築と実践について研究した。成果及び事業終了にあたってのまとめは、取組みごとに報告する。

【動画コンテンツとＩＣＴ活用】

（１）全般

昨年度の構想をもとに、多様な生徒に対する具体的なＩＣＴ活用に基づく施設整備とスクーリング及びレポートの取組みを行った。この取組みは、はからずもコロナ禍の状況において求められた新しい生活様式に基づくスクーリング及びレポートにも適応するものであった。

動画コンテンツの充実についてはすでに完成済みの分を除いて、前期の段階でさらに4割の職員が追加作成をすすめた。これにより、職員全体のＩＣＴに関するスキルは大幅に向上した。この成果の背景として、朝の打ち合わせ後の15分間を活用し、情報科の職員による職員対象ミニ動画編集講座を約1週間にわたって行ったことも挙げられる。

昨年度から今年度にかけて、ＢＹＯＤ（Bring Your Own Deviceの略）の整備とそれに伴うChromebookの利用環境といったハード面での整備が整った。

こうした様々な設備をスクーリングの中で活用していくことで、多様な生徒への支援に役立てることができ、いくつかの成果を得ることができた。

（２）成果

≪具体的な取り組み例≫

①キャリア活動の教室や進路支援の教室にも配備したことで、多様な生徒支援のツールとして活用をすすめた。

②Chromebook を常設した教室をつくり、スクーリング中に生徒が自ら調べ主体的に学習を行った。

③Google Forms等を活用し生徒の意見をリアルタイムでスクーリングに反映させることで、意見交換や多様な価値観に触れ合う機会を設け対話的な内容を取り入れることができた。

④スクーリングや防災研修でJamboardを用いた資料・意見の共有を行った。

⑤Google ClassroomおよびGoogle Meetを活用し、スクリーン画面を生徒各自の机上でも見られるようになり、板書が苦手な生徒や障害のある生徒に配慮することができた。（図１）

これらの取り組みから、ただＩＣＴを活用するのではなく、本校の多様な生徒に対応していく上でＩＣＴをどのように用いると効果的なのかという点を検証し、次の成果を得た。

まず、本校では生徒同士での関わり合いの機会が少ないため、生徒自身が進路等について情報収集するには職員からの働きかけ以外に自分で調べることが大変重要である。したがって①②のように生徒が自主的に活用できる情報端末があると大いに役立つ。

次に、スクーリングにおいても、本校の生徒には声に出して自分の意見を述べることを極端に苦手とする生徒が多く、その場合に③④といった方法で意見を共有できるようにすると、これまで見えてこなかった生徒の学習成果を読み取ることができる。

さらに、③④はコロナ禍において接触や発声を控えなければならない状況でも大いに役立つと思われる。また、スクリーンと手元など視点を切り替えながら学習することを不得意とする生徒も多数おり、そういった場合に⑤の取組みによってこの課題が解消された。この方法は教室内のどの位置からでも均一に画面を見ることができる。

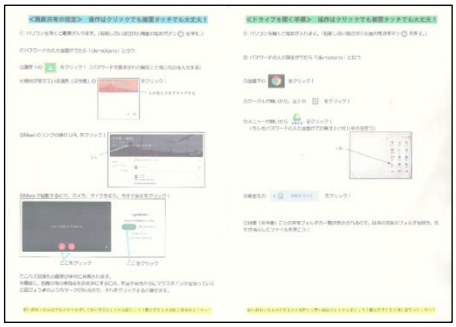
（３）事業終了にあたって

動画コンテンツの作成において、職員の作成に関するスキルがかなり向上したといえる。また、教員が作り手としても生徒に分かりやすく伝えるためには、どのくらいの時間でどこにポイントを置くかなどを考えながら作成した結果、オリジナリティあふれる動画が数多く制作された。一方で、今後の充実に向けて大きなハードルとなるのは、作成時間の負担が非常に大きいことや、加えて、教科ごとに特質がある中で様式の統一をどこまで図るかといった課題もあった。

ＩＣＴ利活用については、今後ＢＹＯＤを活用してさらに活用の幅を広げるためには、個人向けのアカウントを設定する必要があるが、本校ではすでに個人の学習進度を確認するツールとして修悠館マイページがあるため、管理すべきアカウントが増えすぎてしまい、生徒の負担が増加してしまうことが懸念される。このため、マイページと個人アカウントの機能の住み分けをはっきりさせていくことが挙げられる。また、近年のスマートフォンの普及に伴い、パソコンに関する生徒の基本的な操作スキルが不足している傾向が感じられる。限られたスクーリング時間の中で操作指導に要する時間が増えてしまうと、指導すべき教科等の内容が薄らぎ、かえって混乱を招いてしまうということもあった。その対応としてマニュアルを作成し常設する（図２）などの工夫も行ったが、今後もさらに改良を重ねる必要がある。

図１

図２



参考文献）
『特別支援教育ですぐに役立つＩＣＴ活用法』（佐藤里美監修 学研 2018）
「プレゼンテーションソフトの活用で生徒が主体的に取り組むインターンシップ事後学習」（立川直之 『特別支援研究』2015 年 12 月号）

【ＩＴレポート】

（１）全般

仕事・子育てや病気療養で頻繁に登校することが難しい生徒に対する学習支援であるＩＴ講座の一部では、横浜修悠館マイページ（以下マイページ）を介してＩＴレポートの提出・返却を、全て Word 形式ファイルでのやり取りしている。本研究においては、Word 形式ファイルのＩＴレポートについて、これまでの課題を解消するために、３年間で新たにＰＤＦ形式ファイルでのＩＴレポートを作成し、添削やマイページ上でのやり取りを実践できた。これまでの具体的な取り組みは次の①～④の通りである。

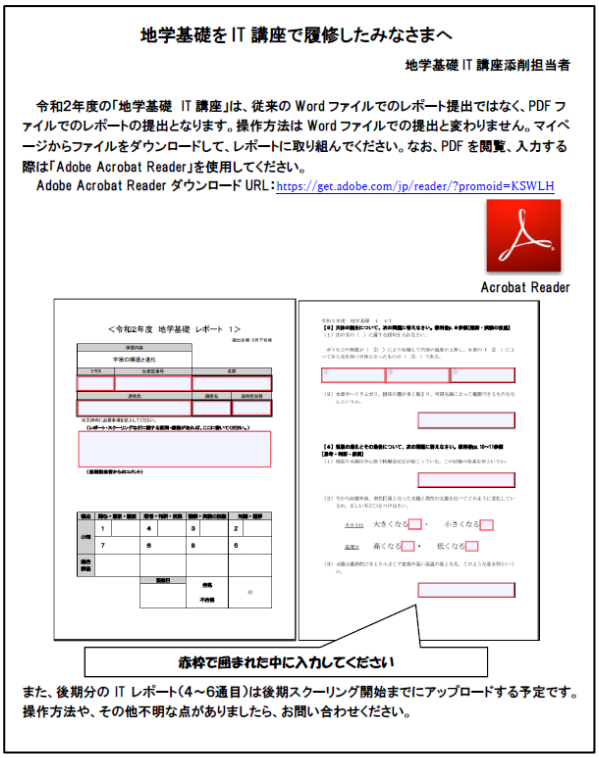
① ＰＤＦ形式ファイルの運用

今年度は理科の地学基礎のＩＴ講座（講座登録者 10 名）において、ＰＤＦ形式ファイルを使用した。生徒からの提出、教員による添削とレポートの返却を実際に行った。

② 講座登録者向け資料の作成

ＰＤＦ形式ファイルでの取り組みは今年度からの新たな試みであるため、生徒対象の説明資料を作成した。内容はＰＤＦ形式ファイルを扱う上での注意事項と、実際にＰＤＦ形式ファイルに入力するために必要なソフトである[Adobe Acrobat reader]のダウンロードの案内を記載した。作成した資料は生徒に配付し、マイページ上の地学基礎のページに掲載した。

講座登録者向け資料



地学基礎をIT講座で履修したみなさまへ

地学基礎IT講座添削担当者

令和2年度の「地学基礎　IT講座」は、従来のWordファイルでのレポート提出ではなく、PDFファイルでのレポートの提出となります。操作方法はWordファイルでの提出と変わりません。マイページからファイルをダウンロードして、レポートに取り組んでください。なお、PDFを閲覧、入力する際は「Adobe Acrobat Reader」を使用してください。

Adobe Acrobat Reader ダウンロードURL：https://get.adobe.com/jp/reader/?promoid=KSWLH

Acrobat Reader

赤枠で囲まれた中に入力してください

また、後期分のITレポート(4～6通目)は後期スクーリング開始までにアップロードする予定です。操作方法や、その他不明な点がありましたら、お問い合わせください。

マイページへの掲載

③　生徒対象のアンケートの実施

ＰＤＦ形式で作成したレポート中に生徒対象のアンケートを挿入した。

④　ペンタブレットを使用したＰＣ上での手書き添削

従来のＩＴレポートの添削はＰＣ上でファイルを開き、マウスとキーボードを使いコメントの入力等を行っている。そのため、紙レポートの添削と比較して自由度が低く、機械的な添削しかできなかった。今回、ペンタブレットを添削に導入し、新たなＩＴレポート添削を試みた。

使用したペンタブレット[XP-Pen Deco Pro Small]

（２）成果

３年間の取り組みを通じて、ＩＴレポートの改善について以下の成果が得られた。

１つ目は、体裁の崩れや想定外の場所への解答入力など従来の word 形式ファイルのデメリットが解消されたことである。従来の word 形式ファイルでは、word のソフトのバージョンや生徒が使用している word のソフトの設定により、フォントなどの体裁が崩れることが見られた。また解答欄の枠はＩＴレポート作成の際に設定しているが、実際には枠外にも自由に入力できてしまうため、本来あるべきではない場所に解答が入力されていたケースもあった。ＰＤＦ形式ファイルではそういった問題が解消し、添削する側としては非常に扱いやすいレポートとなった。

２つ目は、より通常の添削に近い柔軟な添削方法の新たな可能性の発見である。ペンタブレットを使用した手書き添削によって、問題文に直接線を引いたり、従来ではできなかった赤丸を実際につけたり、数式を書いたり、生徒の回答に直接コメントを加えたりなど具体的な添削、言い換えれば普段の添削に近い感覚での添削が可能となった。以前の制約が多い添削と比較すると、柔軟で的確なアドバイスやコメントを残すことができ、生徒によりわかりやすく説明することができるようになった。

具体的には、今年度講座登録者 11 名のうち、８名がレポートを最後までやり遂げ(72.7%)、期末試験まで到達することができた。昨年度も同様の試みで期末試験到達度が 72.7%と全く同じ値であり、レポート添削方法の新たな仕組みとして十分に活用できるとの手応えを得た。アンケート結果も同様であった。

○ＩＴレポート添削の比較

・word 形式ファイル

【9】資源の再利用

	説明文
プラスチック	B
アルミニウム	D　A
鉄	A　D
ガラス	C

添削担当より
アルミニウムと鉄では、リサイクルの際のエネルギー節約率が大きく異なります。
もう一度、教科書を読んで確認してみましょう。

・ＰＤＦ形式ファイル

【４】次の（ア）～（オ）の場所は、プレートの境界としてどのタイプに分けられるか。記号で答えなさい。教科書pp. 96～99参照[思考・判断・表現]

（ア）日本海溝
（イ）ヒマラヤ山脈
（ウ）サンアンドレアス断層
（エ）アフリカ大地溝帯
（オ）大西洋中央海嶺

赤線に注目して
分類しなおしましょう

発散境界	エ、オ
収束境界	ア、イ
すれ違う境界	ウ

・マグニチュード7.2から8.0まで上がるとエネルギーは、

7.2
+0.2
7.4
+0.2
7.6
+0.2
7.8
+0.2
8.0

①　2　倍
②　4　倍
③　8　倍
④　16　倍

全て+0.2なので
①～④は同じ値になります

となるので、最終的にエネルギーは ⑤　16　倍 となる。

○生徒対象アンケートの結果

１．ＰＤＦ ファイルのレポートに取り組んでみて、良かった点があれば教えてください。
・長文をこたえることが楽な点。 ・前回も書きましたが、文字の大きさや合間に文字を打ち込みやすかったです。 ・すぐに提出できる点が良かったです。 ・文字の大きさをＰＤＦで調整してくれるのでやりやすかったです。 ・今までよりやりやすい。
２．ＰＤＦ ファイルのレポートに取り組んでみて、悪かった点があれば教えてください。
・最初に特定のアプリを取らなければいけないことを、知らなくてそこが大変だった。 ・レポート１通目は直接ＰＤＦに答えを入力しましたが、やはり個人的には実際に文字で書かないと記憶に残らない為、2 通目から手書きした後にＰＤＦに入力しました。 ・Acrobat Reader をもっていなかったので、使用の際に少し戸惑いました ・特にありません。
３.word ファイルでの提出をしたことがある方に質問です。word ファイルのレポートに比べてＰＤＦファイルの方が良かった点、または悪かった点があれば教えてください。
・専用のアプリを入れず、そのまま打ち込みができる点です。 ・ワードファイルに慣れていたので、やり方が分からなくて少し難しかったです。 ・１でも書きましたが、文字の大きさは気にせずに書けるのでよかったです。普段使いしていないので慣れていないだけかもしれませんが、word ファイルの方がマウスでの移動が少なく上下左右で次の回答にいけるのでそこは word ファイルの方がよかったかなと思います。文字の見やすさとタイピングの打ちやすさはＰＤＦファイルの方が良いと感じました。 ・word は入力のためのソフトではなく、レイアウトをいじるソフトだと思っているので、こっちのほうが入力もしやすく実用的だと思います。 ・とくにありません。どちらも問題なく使用できています。 ・特にありません。
４.今後ＰＤＦ ファイルのレポートに取り組むにあたって、改善してほしい点、その他ご意見があれば教えてください。
・十字キーでの移動ができればいいかなと思います。 ・とくにありません。ＩＴがあってとても助かりました。 ・よかったと思います。 ・特にないです

（３）事業終了にあたって

今後の課題としては、word 形式ファイルに比べてＰＤＦ形式ファイルでのＩＴレポート作成にはいくつかの工程が加わることである。word 形式ファイルを一度作成し、それをＰＤＦ形式ファイルに変換、さらに解答欄（フォーム）を１つずつ設定することになるので、

１通のＩＴ レポートを作成する時間が大幅に増加した。環境設定に関しても難点があり、生徒が[Adobe Acrobat reader]をインストールすることや、教員が[XP-Pen Deco Pro Small]のドライバをインストールし設定を行うなど、ＰＣ上での設定がやや煩雑である。教員側がソフトやデバイスの使い方を熟知していないと作業にとまどうことも多々あり、ＰＤＦ形式ならではの問題点があることがわかった。これらの問題点はソフトについて研究し、使用していく中で試行錯誤を繰り返しながら、徐々に解決していく必要があると考えられる。

研究を通して、ＰＤＦ形式ファイルでのＩＴレポートの作成・添削・運用は現状課題が多く、次年度から全ての科目においてＰＤＦ形式で行うというところまでは至らなかった。しかし、ＰＤＦ形式であることのメリットや、ＰＣ上での手書きによる添削には大きな利点があることがわかり、今後の可能性を感じた。教員側だけでなく生徒側においても手書きに対応することができれば、現状では難しい数学での数式や、化学などでの化学式などもＰＣ上でＩＴレポートに書き込みができるようになり、ＩＴ講座の幅も広がるであろう。また、ipad やタッチパネル式のＰＣ、液晶タブレットを使用することにより、さらに利便性が向上すると考えられる。今後発展していくだろう同時双方向型のオンライン授業や、ＩＣＴ活用においても応用が効くため、引き続きＰＤＦ形式ファイルでの運用を続けながら研究を重ねたい。

【Classi】

（１）全般

学習動画における外部コンテンツである Classi は、本校の動画コンテンツを補完するものとして主に上級学校進学希望生徒を対象とした動画配信サービスであり、本研究ではこのサービスの利活用方法について研究を進めた。

昨年度までの研究から、Classi を利用したいと考える生徒は一定数いることがわかったが、進学を考えている生徒など一部の生徒に限られているのではないかと想定された。そのため、今年度も引き続き教員からの利用呼びかけをすること、また新たな活用方法の模索を検討した。

（２）成果

〇これまでの取り組み

例年とは異なり、今年度はスクーリングの開始が遅れた。通信制の学習はスクーリングの他にレポートを提出することで成立するが、臨時休業中においても安心して自宅で学習を進めることができるよう、スクーリングの開始を待たずに Classi のＩＤとパスワードを送付することにした。

校内では、生徒が利用しやすい状況を作るため、簡単なマニュアルを作成し、学校の各所に置く予定を立てた。今年度はコロナ禍のなか進学用として、進学指導を主とするキャリアガイダンスルームＢに限定的に設置した。担当の進学アドバイザーに趣旨を説明し、生徒に配付してもらうことにした。

また、全生徒に向けた広報として、修悠館通信にClassi利用を呼びかける案内とマニュアルを郵送した。これらの取り組みの結果、Classiの利用状況は集計を始めた令和元年度から大幅に増加した。コロナ禍を考慮しても、利用促進を進めた成果のあらわれと思われる。

〇活用状況ログについて

Classi社に、主にスクーリングがある５～７月・８～10月・11～12月のClassiの活用状況の調査を依頼した。利用者数と利用時間は以下の通りであった。

＜2020年度の活用状況＞

2020年度	5	6	7	8	9	10	11	12
利用者数	247	93	57	279	265	150	116	116
利用時間	52:16:37	10:02:57	14:39:58	16:20:22	13:41:01	7:03:56	6:41:09	5:53:20

今年度の調査でわかったことは、やはり自らClassiを利用する生徒は一定数おり、特にスクーリングのない時期は活用が増えることがわかった。しかし、スクーリングが始まるとClassiの利用率が低下する（６～７月、10～12月）。このことは、「スクーリングあるいはレポートが何より重要」と捉えていたり、スクーリングがない時期に学習の補完的な活用をしているのではないかと考えられ、学習習慣の定着につながるのではないかと推測される。

また昨年度の活用状況と比較すると、今年度の利用者数はかなり増大していることがわかる。これは、修悠館マイページやClassiが生徒に幅広く認知されていることの表れと捉えることができ、ここまで取り組んできた、Classiの利用促進がある程度の成果を挙げたと思われる。

＜参考：昨年度の活用状況＞

2019年度	5	6	7	8	9	10	11	12
利用者数	41	60	38	78	143	103	59	53
利用時間	2:22:38	10:04:26	2:55:16	2:27:54	22:39:54	13:13:58	6:55:43	2:37:57

（３）事業終了にあたって

今年度は、学校におけるＩＣＴ活用が推進された。そのような動きの中、本校でのClassi利用率も向上しているということが今回の研究でわかった。昨年度からClassiの利用を促進してきたことが、生徒にClassiを認知してもらうことにつながったと考えられる。利用状況を比較すると、今年度の利用の少ない時期でさえ、昨年度の同時期よりも多くの生徒がClassiを利用している。一定数の利用者が存在することは明らかである。

本校には多様な生徒が在籍しており、学習におけるニーズもさまざまである。全生徒に向けた利用促進は現実的ではないと考えられるが、対象を絞ることで、より効果的な

活用方法を見出すことができる。Classi の利用者の多くは、上級学校への進学を考えている生徒で、受験に向けた学習に取り組みたいという目的で利用していると考えられる。今後はそのような生徒に向けて、より利用しやすい仕組みや環境を整える必要がある。

そのためには、「誰が」受験を考えているのか、「何を」必要としているのか、など個々の実態を把握し、Classi での学習を必要とする、あるいは必要であろうと教員が考える生徒に利用を進めたいところである。今後はキャリアガイダンスルームＢを訪れた生徒で、実際に Classi を利用するということに結び付けることができるようマニュアル等を設置し、利用を呼び掛けるとともに、本校で上級学校への進学を考える生徒のニーズを把握し、適切な情報を提供するために、進学アドバイザーとの連携を強化することを今後の課題としたい。また、キャリアガイダンスルームＢを訪れることなく、自分で進路に向けた準備をしている生徒もおり、そうした生徒に向けた学習のアドバイスができるような取り組みについても検討したい。

また本校では、修悠館マイページの中で、各科目の担当者が「レポート解説動画」を作成している。本校生徒の特徴やニーズをよく把握している本校職員が作成するため、生徒にとってはこの動画の方が見やすいようである。Classi と、この「レポート解説動画」との使い分けを考えていく必要がある。これについては、Classi 社との連携をはかり、動画の検索性の向上や内容の検討等をお願いしたい。

本来であれば、今年度から校内でのＷｉ-Ｆｉ利用が拡大され、それに合わせて校内で Classi を利用できる環境を整える予定だった。生徒がラウンジなどの学習スペースで、自分のスマートフォンなどで Classi を活用し、学習を進められるようにマニュアルの設置などを検討していたが、コロナ禍によって学習スペースの利用を制限したため、今年度はその実施には至らなかった。来年度以降、ＢＹＯＤの展開に合わせて、Classi の利用を拡大できるようにしていきたい。

３　３班（支援体制を活用した多様な教育的ニーズを有する生徒へのアプローチの検討）

（１）全般

調査研究にあたっては、「ｅ－ラーニングの新システム稼働について環境整備を行う」こと及び「支援データベース（ＤＢ）を活用した教職員の情報共有体制の整備充実を図る」ことを主眼とした。

今年度の目標は次の３つとした。

１　「文部科学省　多様な学習を支援する高等学校の推進事業」の一環で一昨年度まで取り組んでいた、校内支援の様々な情報を一元化・共有化するための「横浜修悠館高等学校支援データベース」（以下、「ＤＢ」という）を運用し、データの蓄積の徹底及び、より発展的で多様な教育的ニーズを有する生徒への支援体制の充実。

２　一昨年度より導入された「横浜修悠館マイページ」（以下、「マイページ」）による情報連絡及び継続可能な校内相談支援体制の確立。

３　マイページやClassiを活用するための校内環境の整備。

※ＤＢ及びマイページのイメージは（５）資料に掲載

（２）成果

①　ＤＢの運用を行いデータの蓄積の徹底及び、より発展的で多様な教育的ニーズを有する生徒への支援体制の充実。

（ⅰ）これまでの研究より、本校ではＤＢの継続的な運用体制を構築しており、昨年度に引き続きグループ業務の一環として研修会を行い、実践を通じた体制の強化ができた。

（ⅱ）４月及び９月に職員研修会「気になる生徒研修会」において、研修担当者が面談記録、生徒の成長記録、前担任からの申し送り事項などＤＢの利活用について紹介するとともに、研修会前にデータを教職員に入力してもらい、研修会資料とし、ＤＢの利活用を促した。

（ⅲ）年４回の教職員対象アンケートの実施を行い、全教職員がＤＢを利活用する環境を強化した。アンケートの振り返りを行い利用環境の現状と課題について把握した。

※ＤＢアンケート結果及び考察は（５）資料に掲載

（ⅳ）生徒活動支援Ｇと連携して、生徒指導案件に対しても、多様な教育的ニーズを有する生徒の課題を把握するためにＤＢを活用した。具体的には、本年度の指導案件は４件で、指導内容は「器物破損（２件）」「暴言（２件）」である。指導事案が発生すると、担任又は生徒指導グループの担当者が、指導内容をＤＢに記載している。生徒指導グループが本人と面識がなくてもＤＢの情報を活用することで、指導が円滑に進んだ。

（ⅴ）教職員のみならず、スクールカウンセラー（ＳＣ）・スクールソーシャルワーカー（ＳＳＷ）のＤＢ利活用も促進できた。活用にあたりＩＣＴ機器の整備も行った。ＳＣ・ＳＳＷと教職員が情報共有する時間とタイミングには必然的に制限があるため、生徒・保護者との面談前の情報収集をすることで、ＳＣ・ＳＳＷがより多面的に生徒情報にアクセスすることができ、有益な面談につながった。ＳＣ・ＳＳＷは担任への

フィードバックを行っているのに加え、ＳＣ・ＳＳＷとの連携担当教員が面談の記録を残し、広く教職員に情報提供ができるようになった。

（vi） １班と共同し、通級指導に関わる生徒の事前情報としてＤＢを活用できた。

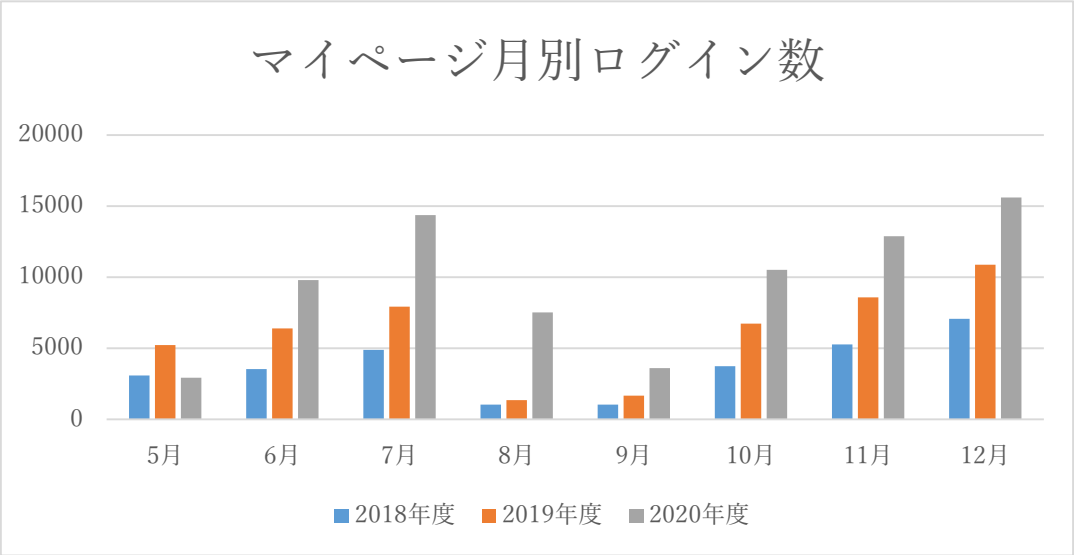
② マイページによる情報連絡及び継続可能な校内相談支援体制の確立。

（ｉ）お知らせ機能

「お知らせ機能」は、教職員からの連絡（お知らせ）が生徒へのトップ画面に表示されるもの、全生徒に一斉送信するだけではなく、指定した生徒にも送信することができる機能である。「お知らせ機能」では、通信制課程での唯一の連絡手段である郵送による通信紙の発送の連絡及び通信紙の重要案件の連絡をグループ業務に位置づけた。

また、教科の諸連絡やコロナ禍における連絡もホームページの掲載とともに行なった。上記の取り組みの結果、マイページへのログイン数は３年間で約３倍に増加した。

【マイページ月別ログイン数】



（ii）個別相談

「個別相談」とは、インターネットを利用した個別の質問・相談等ができる機能である。どのくらいの生徒が活用しているのかデータの整理を行った。内容は簡素なものが多く、電話ができない生徒（緘黙など）に対して有効であった。

マイページの周知が進み、個別相談件数も３年間で約３倍に増えた。

【個別相談件数等】

集計期間	2020 年 5 月 1 日～ 12 月 31 日	2019 年 5 月 1 日～ 12 月 31 日	2018 年 5 月 1 日～ 12 月 27 日

個別相談総件数	734 通	267 通	239 通
平均返信通数	7.85 通	5.90 通	1.68 通
相談者生徒総数	185 人	78 人	72 人
相談者生徒一人当たりの平均相談数	3.97 通	3.41 通	3.32 通
相談対応教員数	48 人	45 人	42 人
相談対応した教員の平均返信通数	15.3 通	5.93 通	6 通

マイページへのログイン件数及び個別相談の３年間での推移である。本年度は生徒がマイページを使えるかどうかの調査をＳＨＲで行ったり、より分かりやすい利用マニュアルを配付したりするなど、生徒への周知を徹底するとともに、家庭にＷｉ－Ｆｉ環境がない、ＰＣ、タブレットがない生徒へは学校から貸出を行った結果、マイページの利用が増えていると考えられる。個別相談も確実に増えている。

③　マイページやClassi（外部コンテンツ）を活用するための校内環境の整備。

マイページにはレポート解説動画があり、Classi ではさらに学習に取り組みたい生徒向けの動画がある。本校は単位制の課程のため、登校した生徒は空き時間があり、校内でもその動画の閲覧などの支援ができるようにChromebook を設置した。Chromebook の設置場所はトライ教室、ラウンジ、キャリアガイダンスルーム、図書館、保健室、カウンセリングルーム、悠ルームの７箇所であるが、新型コロナウイルス感染症対策の観点から公共スペースでの使用を中止し、教職員が常駐し消毒ができる、トライ教室、キャリアガイダンスルーム、保健室、カウンセリングルーム、悠ルームの５箇所で限定的に行った。また、公共スペースで情報収集ツールとしての利用を促進するためのルール作りなど校内環境を整備した。

※Chromebook 設置場所の一つであるラウンジでの使用上の諸注意は（５）資料に掲載

（３）事業終了にあたり

①　ＤＢの運用を行いデータの蓄積の徹底及び、より発展的な多様な教育的ニーズを有する生徒への支援体制の充実

ＤＢの利活用については、個人情報の記載に関する懸念はあるものの、概ね好意的であった。本校では長期的に在籍する生徒もおり、生徒のこれまでの状況や支援過程等について、教員同士の情報共有や引継ぎツールとしてその有効性は高い。さらには、関係機関との情報共有にも活用されている。

今後の課題は、記録媒体としての充実が挙げられる。どのような情報を載せるか、今回得た意見を検討したい。ほかにも、ＤＢにおけるシステム的な保守や、生徒指導における

ＤＢの活用が課題である。現在、ＤＢが主に生徒への「支援」として活用されているため、「生徒指導」としての活用は限定的である。「支援」が事前に行うのに対して、「生徒指導」が事後に行う特性上、事前にＤＢを使用して生徒指導案件を未然に防ぐことが難しいものがある一方、再発防止につなげることはできている。

② マイページによる情報連絡及び継続可能な校内相談支援体制の確立

お知らせについては充実した内容になり、生徒も多くが閲覧したことが分かった。課題としては、通信紙で郵送している補助プリントの内容や教科の連絡を継続的に、充実させる必要がある。

個別相談については生徒のニーズがあることが分かった。一方、至急対応が必要な内容なものがあったり、文章では答えにくいレポートの内容であったり、簡素な内容なものであったりと多岐にわたった。個別相談のトップ画像ではすぐに返信できないことがある旨を記載しているが、生徒にも活用のためのルールの周知が課題である。

③ マイページやClassi（外部コンテンツ）を活用するための校内環境の整備

Chromebookの設置に向けては各設置場所の台数確保、使用のためのルール作りを行い、環境整備を行ってきた。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症対策の観点から公共スペースでの使用を中止したため、今後どのような課題があるか等の対応までは検討に至らなかった。

（４）今後に向けて

① ＤＢの運用を行いデータの蓄積の徹底及び、生徒の多様な教育的ニーズに応えるためのより発展的な支援体制の充実

ＤＢありきではなく、あくまでも支援に向けた教員間の連携を円滑にするツールのひとつとしての利活用について周知するとともに、グループ業務として位置づけ、継続的な活用が推進できるよう、今後も研修を重ねていきたい。

また、ＤＢを生徒指導で活用していくためには、生徒指導の案件をＤＢに記録し蓄積していくことが重要である。この蓄積が次の生徒指導案件を減少させるツールとなる。「生徒指導」の際にも積極的にＤＢを活用していくよう教職員に働きかける必要がある。今後は、支援と指導の一本化に向けたシステムの構築をさらに充実させたい。

② マイページによる情報連絡及び継続可能な校内相談支援体制の確立

お知らせについては継続的に行えるよう、一部はグループ業務に位置づけ継続的に行える体制を整えた。しかし、教科についてのお知らせが少ないため、継続的に行えるように校内研修やを行ったり、実際に一度お知らせ機能を利用してもらったりするなどして、教職員の理解を進める必要がある。

個別相談については生徒に周知させるためにトップ画像の改修や、お知らせ時の返信

での内容の精査が必要である。

③　マイページやClassi（外部コンテンツ）を活用するための校内環境の整備

校内環境の整備の準備はしたものの、一部は新型コロナウイルス感染症対策の観点から中止している。今後は、公共スペースのChromebook設置を目指したい。また、今回のルール作りには感染症対策が設けられていないため、使用前後の手の消毒の徹底や使用者の名簿作成など、感染症拡大防止の観点から改訂版を作成する必要がある。

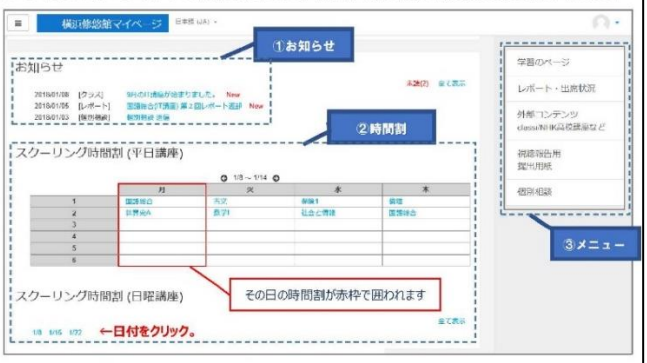
（５）資料　その他

【ＤＢ　イメージ】

④　項目ごとの集計処理ができる。
将来的には支援マニュアル等としての活用も可能。

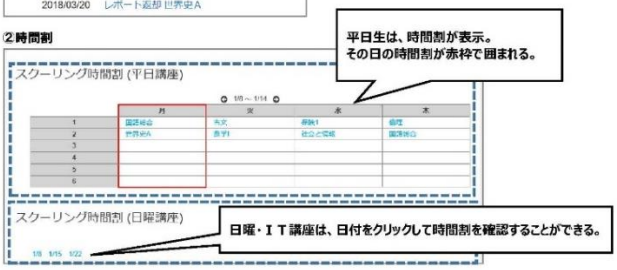
【マイページ　イメージ】

共通画面である横浜修悠館マイページのトップページには「お知らせ」「時間割」「メニュー」が表示。
「メニュー」では、学習ページ・レポート・出席状況・外部コンテンツ・視聴報告用提出用紙・個別相談・お知らせ機能へ移動する。



①**お知らせ**…学校からの連絡通知や個別相談の返信通知が表示されます。※New は未読のメッセージ。
ＩＴ講座受講生は、レポート返却通知が表示される。

②**時間割**



③**メニュー**

Ⅰ．**学習ページ**…講座一覧画面が表示される。
講座一覧画面では、本人が履修している講座のみに絞り込む一覧表示と、全講座の一覧表示が可能。
講座一覧には、その年度に開講される講座のみが表示。

Ⅱ．**レポート・出席状況**…「スクーリング出席」「レポート」スイッチを切り替えることで情報の確認ができる。
●スクーリング出席：科目・特別活動の出席回数が確認できる。

●レポート提出：自身のレポート提出状況の確認が行える。

※出席やレポートの状況は次の日反映される。

Ⅲ．**外部コンテンツ**…ＣｌａｓｓｉやＮＨＫ高校講座を視聴することができる。

Ⅳ．**視聴報告用提出用紙**…視聴報告書の印刷ができる。

Ⅴ．**個別相談**…先生に相談をすることができる。

【ＤＢに関わるアンケート結果とまとめ】

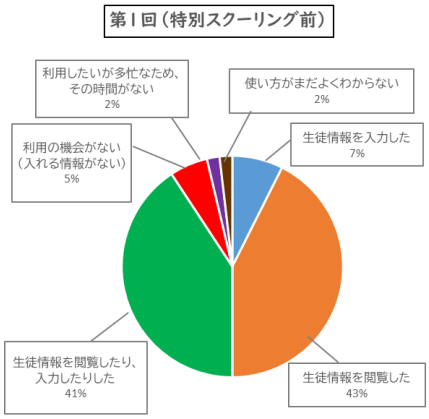
令和２年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、６月より分散形式の特別スクーリングが開始した。ＤＢにかかわるアンケートは、生徒の学習活動の時機に合わせて計４回行った。内容は実施時期に合わせたものを取り入れた。なお、第４回は、年間を通した振り返りとしての回答を求めた。

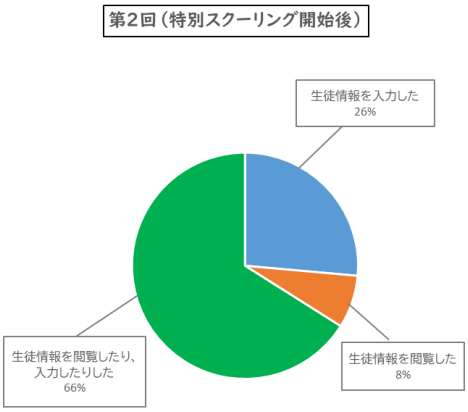
実施日　第１回　５月 18 日～６月９日（特別スクーリング前）
　　第２回　６月 29 日～７月１日（特別スクーリング開始後）
　　第３回　８月５日～８月 21 日（前期スクーリング後半）
　　第４回　１月４日～１月 14 日（１年の振り返り）

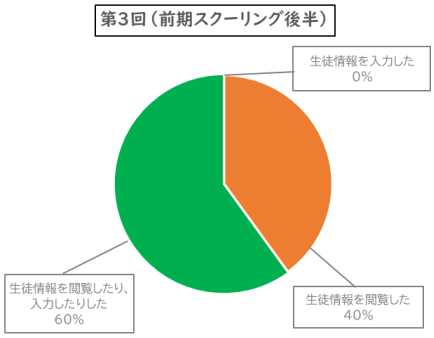
アンケート内容

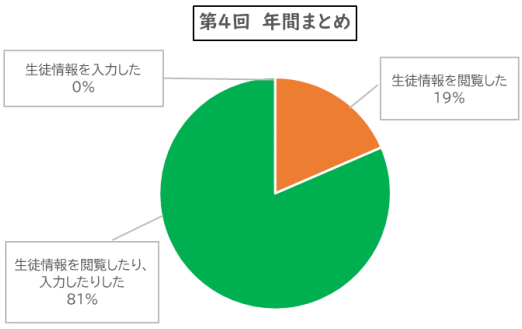
		第１回	第２回	第３回	第４回
１．	修悠館データベースを利活用しましたか。	○	○	○	○
２．	データベースを閲覧したきっかけは何ですか。		○	○	○
３．	データベースを入力したきっかけは何ですか。		○	○	○
４．	データベースを利活用して生徒理解は深まりましたか。		○	○	○
５．	入力できなかった理由を教えてください。		○	○	○
６．	あなたにとって、修悠館高校で「気になる生徒」とはどういう生徒ですか。			○	
７．	データベース入力時に注意していることは何ですか。			○	
８．	データベースに情報入力することについて迷ったり戸惑ったりすることはありますか。			○	
９．	データベースには支援を連携するための側面があります。入力後に、担任や教科担当にデータベースに入力したことを伝えていますか。			○	
10.	データベースを使ってみた率直な感想を教えてください。		○		
11.	修悠館データベースについての意見。			○	○

1．修悠館データベースを利活用しましたか。

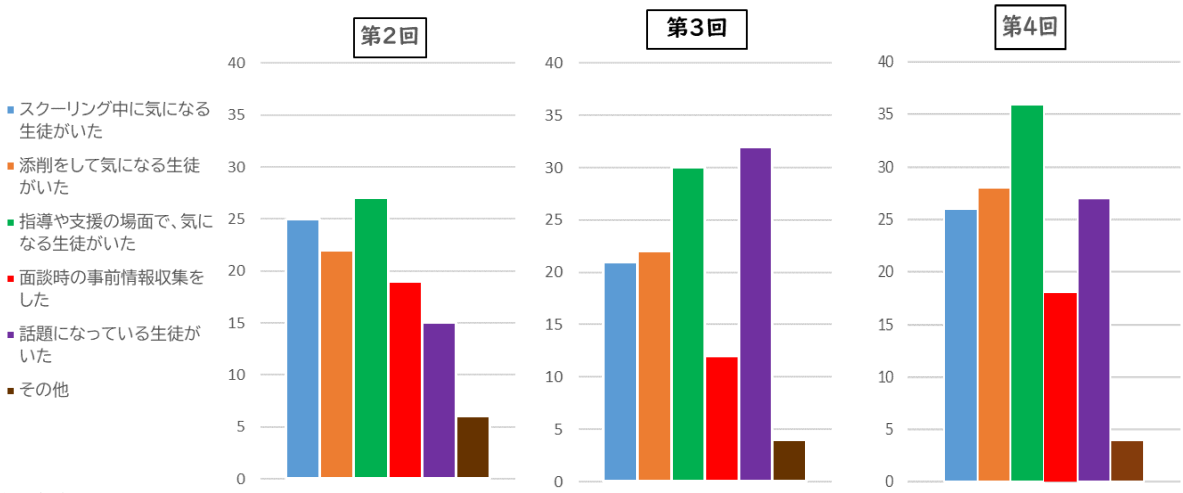








2．データベースを閲覧したきっかけは何ですか。（複数回答可）



第２回

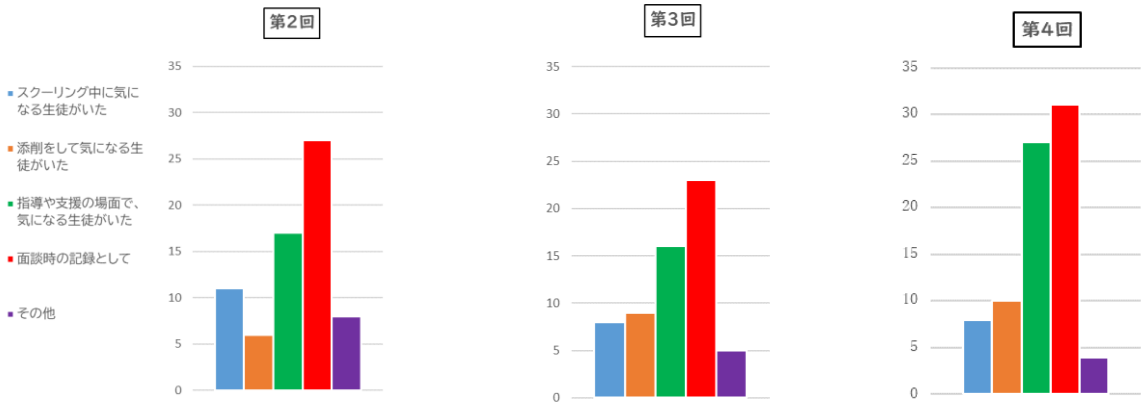
・マイページ経由で質問があり、入院中であると書いてあったため気になりデータベースを閲覧した。

・生徒連絡に必要は情報の確認のため。
・自分のクラスの生徒について、児童相談所の情報提供を入力したと管理職から報告されたため。
・集計部分の閲覧による生徒実態把握。（不登校生徒数、これまでの支援など）。
・取り出し担当の生徒についての情報収集。
・氏名のフリガナの確認、生徒の出身中学による検索。
・特別指導案件があり該当生徒情報の閲覧及び内容の入力をした。
・講座にいる生徒の確認。

第３回
・初回のカウンセリングの際に。事前情報をカウンセラーに伝えるため。
・新たな書き込みをしたと、聞いたから。

第４回
・担任している生徒の過去のことを確認した。
・「その他処理」の抽出処理による生徒に関わるそれぞれの一覧から人数や状態の把握。
・朝の打ち合わせや生徒指導の臨時職員会議で情報提供があった際の確認のため。
・生徒の氏名の読み方や年齢などを知りたかったため。
・外部からの情報提供や、照会等。

３．データベースに入力したきっかけは何ですか。（複数回答可）



第２回
・児童相談所等の重要情報については、該当職員と調整のうえ入力することにより、校内での情報共有がうまくいった。
・クラスの生徒の様子を記録した。
・関係機関との連携記録のため。
・レポートにボランティア経験の記述があり、記録に残したいと思った。
・部活動や生徒の活躍の様子の記録のため。
・取り敢えず、些細なことでも全部記録しておけば、後々で何かのヒントになるかと思った。
・他の先生からの情報共有の記録として。
・特別指導案件があり該当生徒情報の閲覧及び内容の入力をした。
・外部や連携機関等からの情報提供により。
・進路面談や病気のことで相談を受けた際などに入力した。

第３回

・関係機関との連携など、個別の支援の記録として。

・支援の場面で至急、行政との連携要件が出てその件をＳＳＷや先生方と共有する必要があった。

・日常の記録として入力。後で何か役に立つかもしれないと思った。

・新型コロナウイルス感染症に罹患した疑いのある生徒の対応も記録として残した。

・部活動の様子や情報。

・校内で見かけた様子について。

第４回

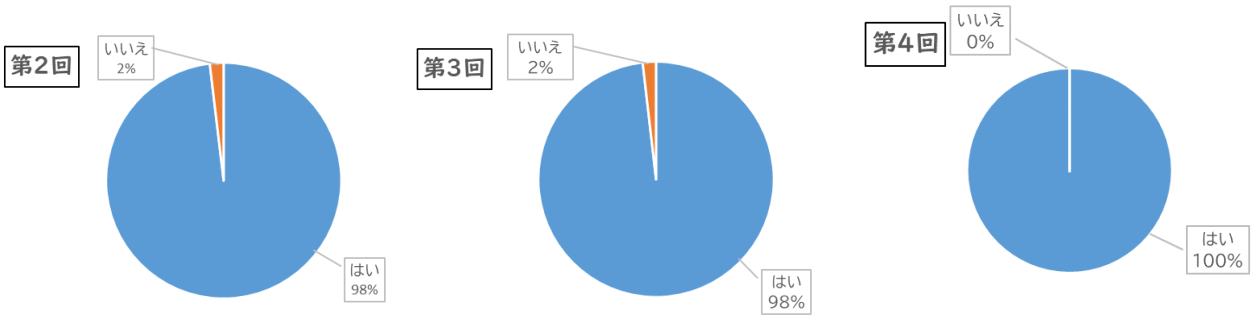
・関係機関との連携や支援を行った際の記録として。

・行政機関との連携。

・クラスを引き継ぐ次期担任への情報として。

・情報共有のため。

４．データベースに入力したことで生徒理解は深まりましたか。



５．データベースに入力できなかった理由を教えてください。（第２回～第４回より抜粋）

第２回

・必要を感じる生徒がいなかった。

・新たな情報が特になかった。

・すでに同じような内容が書かれていたから。

・状況を静観しようと思ったため。

・様子を見てから、と考えた。

・入力する内容について，整理をしていなかった。

第３回

・他の業務が忙しすぎて、余裕がない。

・入力の必要性を感じていないから。

・情報を共有していたため、入力は担任に一本化した方がよいと判断したため。

・特に入力することがなかった。

・入力するほどの奇異さは、なかったから

・類似の内容がすでに記載されていた

・面談や対面指導の場が少なく、大きな問題行動もなかった。

・入力を後回しにしてしまった。

第４回

・保健室では来室記録として別に入力しているので、重ねて入力する時間がない。気になったことは、担任等にすぐに報告している。

・新たに入力するほどの情報がなかったため。

・入力する情報かどうか判断ができなかった。

・似たような記述がすでにあったため。

アンケートの回数を重ねるにつれ、ＤＢの閲覧・入力は増えた。アンケートそのものが DB の利活用の促進につながった面もあるが、学校生活の 1 年の流れのなかで学習や支援にかかわる面談が増加し、スクーリングや添削を通した生徒理解の必要性が高まったことがアンケート結果より読み取れる。当初は閲覧・入力できない理由として、「多忙であること」「入力するほどではない」という回答もあったが、第２回アンケートの入力した内容からは生徒と接する機会が増え、微細なことでも記録して生徒支援につなげようとする意識の広がりが分かる。入力した内容については面談内容が圧倒的に多く、次に学習指導の場面、学校で観察した様子が続く。また、生徒の特性、対応上の留意点については、本校ならではの内容があった。

６．あなたにとって修悠館高校で「気になる生徒」とはどういう生徒ですか。具体的に教えてください。（第３回アンケート抜粋）

毎年９月に行われる教育相談・学習支援グループによる「気になる（気にしてほしい）生徒研修」と連携して、本校教員の「気になる生徒」の像を調査した。重複する内容は省いたが、すべての教員が自分の言葉で「気になる生徒」について表現しており、本校における「支援が必要な生徒」が多角的に浮かび上がった。生徒とのかかわる立場（担任なのか、教科担当なのかなど）によって注目しているのが学習面であったり生活面であったりするが、この回答からは「支援」「教育的ニーズ」という昨今の教育で語られる言葉が実際のある教育現場ではどのような具体性を持っているのかが見えてくる。

＜学習面＞

・人間関係や学習など、なんらかの支援が必要な「困り感」を抱えている生徒。

・学習が進んでいない生徒。入学しても活動できない生徒。

・スクーリング中やＳＨＲなどで「あれ？」っと引っ掛かった生徒。

・自力でレポートを作成することが困難な生徒。

・課題の意味が理解できない生徒、こちらが手取り足取り指導しないと課題が合格しない生徒。

・レポートの提出がスムーズにできていない生徒。

・学校に来ていたり、スクーリングに出ていたりするにも関わらず、レポートが思うように出せていない生徒。

・スクーリングに出席しているのに、レポートの提出が遅かったり、回答の間違いが多い生徒。

・学習障害があると思われる生徒。

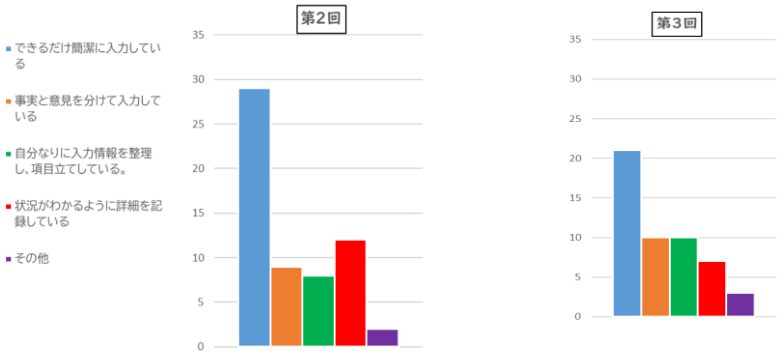
・まったく読めない字を書く。

・レポートの文字や内容が雑な生徒。

・単なる学習不足か、何らかのハンディキャップがあるのかということ。
・前を向かない。名前を書くのに時間がかかる生徒。
＜コミュニケーション面＞
・対応が一筋縄でいかない。返事に時間がかかる。視線が定まっていない。
・話をしても理解ができない。同じことを何度も繰り返す。自分を客観的にみることができない。精神的不安定な状態が特に重い場合。などなど、多数。
・話が噛み合わない、または説明などがうまく出来ない生徒。
・話を覚えていない、話がやたらと長い生徒。
・指示を理解することができない。指導に従わない、指示が通らない生徒。
・距離感の取り方に困る生徒。
・コミュニケーションにおいて、報告・連絡・相談が極めて困難である生徒。
・周囲に対し迷惑となる言動、行動をとってしまう。
・独特な癖のある生徒。保護者と本人の意向に違いがある生徒。
・特異な言動のある生徒。言動に不自然なところがある生徒。
・教員とコミュニケーションを取ることが困難なため、コミュニケーションを取る上で事前に情報を収集した方が良い生徒。
・生徒同士、生徒から職員への距離感がうまく保てず、人を巻き込む生徒。
・問題のある発言をする。
・大人しく、自分の考えを全く表現しない生徒。
・いろいろ困っていそうな生徒。また、それを自分からいえない、「言うこと」自体に気が付かない、生徒。
＜その他＞
・障害者手帳を所持し、特性に合わせた社会活動の場が必要となる。
・教育的ニーズのある生徒。支援が必要と感じる生徒。
・支援が必要と思われるのに、まだ支援につながっていない生徒。
・特に、配慮を要する生徒、配慮したほうが良いかもしれない生徒。
・配慮ポイントが発達の問題なのか、心関係なのか、環境なのか、気になるのでまず確認したいと思う。それによって対応のバランスを考える。
・対応に注意が必要であったり、バックグラウンドを知っておく必要があると感じられる生徒。
・身体的にも精神的にも何かを抱えていることがうかがえる生徒。
・学校生活を送る上で苦労しそうな生徒。何か問題を起こしそう（巻き込まれそう）な生徒。
・社会参加をするにあたって気になる特性を持っている生徒。
・高校卒業後の進路の場で、困難が発生することが予想される生徒。
・家族関係が複雑、うまくいっていない生徒。
・生育歴において適切な支援を受けてこなかった生徒。
・ＳＣ相談を繰り返しても改善が見られず、本人、保護者を含め学校以外の別の手立てを考えなくてはいけない生徒。
・希死念慮があり、担任や相談に乗ってくれた職員に依存を繰り返す生徒。
・心配な生徒。対応をどうしたら良いのか、情報をたくさん知っておきたい生徒。

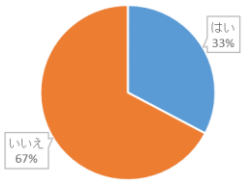
・情報を複数で共有して指導（対応）するべきだと判断した生徒。
・朝礼などで話があがる生徒。
・「全員を気にする」ということで。覚えていられないので、全員支援の対象と考えます。職員も含めて。
・結果や数値には出てこないけれど、支援を必要としている生徒。

７．データベースに入力するときに気を付けていることは何ですか。（複数回答可）

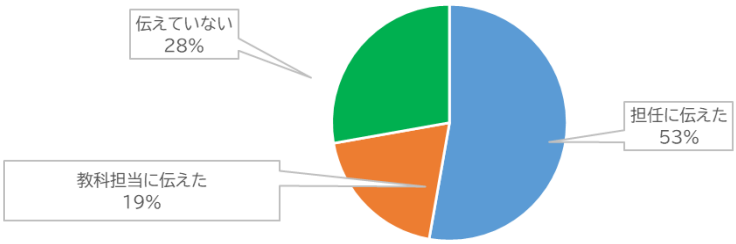


第２回
・簡潔すぎず、詳細すぎず、他の先生が閲覧した時に参考になるようにしたいと心がけている。
・内容の重要度や入力時間が確保できているかによって、簡潔にしたり詳しくなったりしている。
・〇年度にすべて単位修得できた　など良いことも入れるようにしている。
第３回
・簡潔ではあるが、後から見返して内容がわかるようにしている。
・直接関わった生徒の情報入力は、比較的詳しくしている。
・指導、支援する立場で記載する。

８．データベースに情報を入力することについて迷ったり戸惑ったりすることはありますか。（第３回）



９．データベースには支援を連携するための側面があります。入力後に、担任や教科担当にデータベースに入力したことを伝えていますか。（第３回アンケート）



入力した内容が生徒の判断材料となってしまうのではという懸念の声が多かったように、どこまで入力するか、入力すべきかというのは、利活用するたびに毎回のように直面する課題である。入力の仕方についても、現時点では決まった形式はなく、個々の教員の工夫に頼っている。客観的にあろうとしても、そのように生徒の実態を伝えることの難しさもまた、如実になった。ＤＢが教員間の円滑なコミュニケーションや連携につながっているか、ツールありきになっていないかという点は今後考えていかなければならない課題のひとつである。

10. データベースを使ってみた率直な感想を教えてください。（第２回より抜粋）

・生徒の在籍中の情報を入力しておけば、担任が変わったところで引き継ぎが確実にできる！

・生徒の情報がわかりやすい。一度確認しても忘れてしまうので、何度でも確認できる。担任が変わったときの引継ぎにもなると思う。face to face の情報交換が重要だと思うが、それを補足してくれる。

・着任時、担当クラスの生徒情報をすぐに確認でき良かった。

・些細なことでも記録しておくと、いざというときに大きな情報になるかもしれないという意識で入力している。実際、気になる生徒がいる際、対応の注意点やポイントを知ることができた。今後もクラスの生徒を中心に時間が許す限り入力を続けていきたい。

・大変貴重な情報源となっている。担任でありながらクラスの生徒のことで把握しきれていないことも多々あり、もっとしっかりせねばと思うことも多い。

・自分もしなければいけないのだが、入力を増やしていくことで有用性が高まると思う。

・気になる生徒のチェックだけでしたが、入力しやすかったこと。

・便利だと思う。私自身過去の支援状況等確認するのに役立っている。

・過去の情報から蓄積されていくので、生徒の状況の変化が時系列で分かる。 生徒の特性の理解につながったり、教科担当者同士の共通理解につながったりしている。

・時系列で情報が整理されており、非常に活用しやすい ・学習指導、進路指導、生活指導にあたりどのように接するか一覧できる。

・最初は入力するのが面倒だったが、慣れるととても便利である。

・スクーリング中に気になった生徒は担任に直接報告している。データベースに入力しても入力したことに担任が気づかないため、結局は直接担任に伝えることになる。大事な内容なら教科担当からの報告を受けて担任が入力すればいいと思う。

・多様な生徒、保護者への対応・理解に非常に役に立つと感じる。

・担任や担当との面談を補完するものとして非常に有益なツール。

・ＳＳＷやＳＣへの情報提供にとても役立っている。生徒の情報を得たいときに、担任等が見つからなくてもすぐに確認できる。自分も含めて、なるべくこまめに入力できると良いと思う。
・すぐに知りたい生徒情報が見られて良い。もっと情報量が増えるとより生徒を理解して、接することができる。
・今年に入り、新入生に関する中学校側からの来校による情報提供、児相主催のカンファレンス依頼が急増している。また、警察からの問合せも複数あり、行政側の生徒（家庭）対応の変化〈きめ細かく継続性・社会復帰を意識〉を感じている。これに学校として応える際、データベースの情報は大変有効である。「あってよかったデータベース」本校にとってなくてはならない存在だ。
・気になる生徒について担任などに聞く前に調べることで、担任の手間を少し省ける気がする。
・生徒の情報が閲覧しやすく、とてもいいものだと思う。
・使いながら理解をしていきたい。
・情報共有ができ、自分が生徒対応をする際に気を付けなければならないことを意識できるので非常に活用価値がある。
・生徒の詳しい病状（診断）を知ることができる。
・生徒・保護者対応の際、事前情報を把握でき適切な対応につなげることが出来ると思う。
・重要と思う情報を一人で抱えずに済むので安心感がある。

11．修悠館データベースについての意見（第３回、第４回）

第３回

・もっと「共有」することができるとよい。一部の先生の間では「気にしている」生徒であっても学校全体では把握していない場合もあり、それがトラブルにつながってしまうこともあると思う。
・様々な調査が求められ、データベースを活用するが、データベースに反映されていない（例えば、湘南高校や横浜平沼高校からの移行生や、古くから在籍している生徒など）ので、調査のたびに違う資料から引っ張るのが大変である。
・赴任時に生徒の情報を見られるシステムがあることがとても有用だった。
・他校でもデータベースの必要性は非常に高まっている。
・生徒に対する先入観を持たないという意見から実施されたものだが、中学校から本校への連携の期待に応える意味でも、左側の目隠しは必要ない（注：現在、初期画面は左半分の個人情報が隠れる設定になっている）。
・様々な立場の人から情報が集約され、活用されるようになってきたと感じるが、内容についてカテゴリーなどを整理した方がもっとわかりやすく、指導しやすくなるのではないかと感じた。
・担任が替わっても継続して情報が共有できるので、たいへん有効なものと考えている。
・データベースを入力したり閲覧したりしながら、生徒理解や今後の支援・指導の参考にしている。
・学校全体としてデータベースの活用をもっと進めていく必要がある。
・様々な部署と連携しながらタイアップ企画を考えていきたい。
・データベースを活用した成功事例を知りたい。

第４回

・顔写真を同じ画面で見られるとよい（最新のものである必要はない）。
・入力内容の概略（タイトル）が入れられれば見やすく（見つけやすく）なる。かかわりが多い生徒の場合、

見たい情報がどこにあるのか、検索に時間がかかる。
・以下の項目があればさらにありがたい：居住市区／（卒業生の）進路先、卒業年度／
現在の単位修得状況（または卒業までの見込み年)。
・学習進度表も併せてみることができたらよい。
・朝の打ち合わせの生徒情報提供の際には、ＤＢ利用を原則としてはどうか。打ち合わせ掲示板には生徒のクラスと生徒証番号の記入のみとし、詳細はＤＢを見ながら、がよいと思う。打ち合わせにいなかった職員にも伝わるし、あとから確認したいときも便利だろう。必要に応じて写真もアップしておくこともできる。生徒指導案件の時も同様にすると、その後の指導にも役立つと思われる。
・来年度以降、職員の入れ替わりも多くなると予想されるので引き継ぎの意味も込めて活用していくべきである。
・在籍年数が長い生徒がいるので、生徒情報の共有という観点からはたいへん有効な方法だ。
・取り出しの生徒への対応で、どのような支援が今までにあり、どのような形で指導していけばよいかという方向性データベースを閲覧したことでつかむことができた。
・気づいたときにすぐ閲覧できるので助かる。また司書も即アクセスできることが本当に有難い。
・個別対応者に記入者名（職員番号でも）を入れることができて、それを検索できるとよい（自分で記入しておいてどこに記入したか忘れてしまうことがある)。
・データベースに入力することが目的となってしまっていると、本来の目的とは異なってくる。入力して、データを蓄積していくことも大切だが、教員間の生のコミュニケーションも大切にしたい。（入力だけされていて、担任には知らされていなかったことがあった。）
・生徒情報がすぐに手に入り、対応にスピードが必要な時に便利に活用できて良い。
・データベースの試行を始めたころは、個人情報を電子データで公開することに対する不安が根強かった印象だが、職員の入れ替わりもあり、拒否反応が少なくなった印象である。反面、個人情報に対する警戒心が薄くなった印象もあり、気を付けたい。
・一時期、入力内容が消えたことがあり、面談記録のバックアップをとっていなかったので焦った。やはり、紙媒体での記録保存も欠かせない。入力後にこまめにプリントアウトして保存する習慣にしようと思う。
・支援の継続のための情報共有にとどまらず、支援の方向性を決めるときに大変役立つツールである。ぜひ横浜修悠館で継続発展させたい重要な教育資源だと考える。
・今年度は特にＤＢを活用した年であったと思う。
・面談記録だけでなく、スクーリングやレポートに気になった生徒の情報の入力があると、気になった生徒がいたときに照会できて助かる。
・手間はかかるが、未来づくりのレポートの記録として、スキャンしたデータをいれておいているので、今後の進路相談などに活用したい。
・些細なことでも教科担当間で共有できると、添削のコメントや授業内指導で気を付けるべきことも把握しやすくなる。些細な事からでも、もっと入力してほしい。

【ラウンジ PC を使う上での注意５箇条】

ラウンジＰＣを使う上での注意５箇条

①使用時間は平日 1～4時間目、日曜は1～6時間目までとする

（4週目は使用禁止）。

※イヤホンは持参し音声を周囲に流さないようにする。

②使用時間は 1 人 30 分程度とし、連続使用はしない(一度、席を空ける)

③使用目的は勉強や調べもの等の検索のみとし、ブログ、SNS 等への書き込み、　ネットショッピングの利用は禁止です。

④SNS やネットを通じて他人の悪口や誹謗中傷を行った場合は特別指導の対象になります。

⑤その他、使用方法はラウンジに常駐している先生の指示に従うこと。

※この PC はみなさんが接続したすべてのサイトにおいて記録が残ります。ネットパトロールをおこない正しく使用しているか確認しているので、正しい利用を心がけましょう！

Ⅴ　ＬＤ学会参加報告・発表会報告

日本ＬＤ学会　第 29 回大会（兵庫）発達障害と教育の未来　オンライン配信参加報告

日　時　令和２年 10 月 10 日（土）～11 日（日）
会　場　オンライン

日本ＬＤ学会の第 29 回兵庫大会は、「発達障害と教育の未来～学びの多様性をふまえた学校づくりへ～」というテーマで２日間開催された。教育講演や大会企画シンポジウム、自主シンポジウム、ポスター発表等に参加し、特別支援教育に関係する全国の様々な取り組みを知る機会となった。本校の教育活動に生かすことのできる内容が多々あった。

（１）教育講演１　「通常の学級でできる自立活動」中尾　繁樹（関西国際大学　教育学部）

通常の学級には、通級による指導の対象とはならないが、障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とした指導が必要となる子どもたちがいる。学習指導要領では，特別な配慮を必要とする子どもへの指導を行う場合に、「特別支援学校等の助言又は援助を活用しつつ、個々の幼児児童生徒の障害の状況等に応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする。」と示されている。「特別な配慮の必要な子」「気になる子」という表現は保育士や教師目線での困り感に関するもので、本来の子どもたちのニーズを考慮したものではないといえる。

特別支援教育を捉えなおすと、子どものニーズに合わせるという大前提があるとするならば、すべての子どもたちを対象としなければならない。そこで「みんなの特別支援教育」という言葉が紹介された。特別支援教育の視点を持って子供たちの実態を把握したり、指導したりすることで、子どもたちの困っているところや躓きが早期に発見でき、二次的な問題を予防できると考えられ生まれた。しかし、いじめや不登校、学級の機能不全が減っていないのは、特別支援教育が未だ特殊教育の枠を出ず、「特別な配慮の必要な子供」という言葉にこだわり、子どもの視点に立った実態把握や教育活動ができていない現状がある。

自立活動は、本来障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するために、幼児児童生徒が、困難な状況を認識し、困難を改善・克服するために必要となる知識、技能、態度及び習慣を身に付けるとともに、自己が活動しやすいように主体的に環境や状況を整える態度を養うことが大切であるという視点で行われる。最近の通常学級での様子を見ていると、「平仮名や漢字がうまく書けない」「姿勢がすぐに崩れてしまう」「休み時間からの切り替えができにくい」「人の話が最後まで聞けずすぐ騒ぎ出す」など、学習や規律に関する問題も多く見られるようになってきた。さらに二次的な問題として、「不登校」や「いじめ」も増加傾向にある。これらの子供たちはいわゆる特別支援教育の対象として、支援の制度上には上がっていない。今現場の教師たちが指導法や関わり方について本当に困っているのはこれらの子どもたちである。

自立活動の「時間の指導」は、特別支援学校や特別支援学級、通級指導教室で「個別の指導計画」のもとで行われるものである。しかし自立活動の「人間としての基本的な行動を遂行するために必

要な要素」という視点を通常の学級の授業に取り入れることで、すべての子供が対象となり、楽しく参加できる授業づくりができると考える。それができて初めてすべての子どもが「わかる・できる保育・授業づくり」と「安心・安全の学級づくり」につながっていく。通常の学級における授業デザインをどう組み立てるかは、個々の子どもたちの「適切な実態把握」に基づいたプランが基本であり、自立活動の視点を踏まえた教科教育の設計が必要になる。それらができることによって、安心して過ごせる学級集団づくりもできる。

すべての教員が特別支援教育を理解し、自立活動の視点を取り入れた「授業づくり」を行うことが、授業のユニバーサルデザイン化を実践していく基礎になると考える。現状の授業では、適切な実態把握の下で、子どもたちの困り感を理解し、様々な場面で予想される困難さや原因を事前に把握しておくことで、それらの原因に基づいた指導の手立てや授業展開が実施されていない。すでに本校でもⅠに示した「重層的支援の仕組み」を整備して、多様な生徒のニーズに応じた支援をしているが、講演で示された「本来の子どもたちの視点」での支援のあり方を心がけたい。

（２）大会企画シンポジウム　「通常の学級における多層指導モデル」

「多層指導モデル」とは、「通常の学級において、異なる学力層の子どものニーズに対応した指導・支援を提供していく」というコンセプトのモデルである。子どもが学習につまずく、つまずきが重篤化する前に指導・支援を行うことを目指している。「多層指導モデル」は 3 層構造になっている。1st ステージでは、通常の学級の授業の中で、質の高い、科学的根拠に基づいた指導を全ての子どもに対して実施する。2nd ステージでは、伸びが十分でない子どもに対し、通常の時間に加え、その他の時間帯も使いながら補足的な指導を行う。3rd テージでは、それでも伸びが乏しい子どもに対し、より個に特化した集中的な指導を実施していく。「多層指導モデル」を機能させるためには、アセスメントと科学的根拠に基づいた指導をいかに連動させていくかが重要とされている。

多層指導モデルを研究・実践している 3 名の先生方からの話題提供は以下のとおりである。

①「多層指導モデル MIM のアセスメントテストと学力との相関関係」

松本 秀彦（高知大学大学院総合人間自然科学研究科）

MIM-PM のアセスメントテストの得点と学習成果の関係性については海津ら(2008)をはじめ科学的知見が得られている。小学生においては低学年のときに受けたアセスメントテスト得点とその後の国語学力テストの関連性を、中学生においては国語および英語の試験結果とアセスメントテスト得点との関連性に関する発表であった。小学校 2 年生の 12 月時点の読み流暢性はその後の国語の成績に強い関連があること、中学生においても読みの流暢性が学力と相関することから、読み流暢性が学力を支える大きな能力であること、読みが苦手な児童への早期支援はその後の学習活動をより充実させるために大変重要であることがあらためて確かめられた。

②「通常の学級におけるかけ算九九学習多層指導モデルの構築に関する研究」

高畑 英樹（社会福祉法人陽気会）

かけ算九九学習を認知情報処理モデルで捉え直し、発達障害児のかけ算九九学習の誤りを障害特

性と認知特性の両要因からの誤答分析を行った。1st ステージでは、通常の学級で行うかけ算九九学習を学習する全ての児童に対して、認知情報処理モデルに基づき、主に入力や出力でのつまずきを防ぐ支援や配慮を取り入れた効果的な指導や配慮を行った。1st ステージ終了時には、九九 36 問プリントで習得状況を評価し、誤答分析による類型を行った。2nd ステージの介入支援プログラムは、習得別のグループ学習やペア学習の指導形態を取り入れ、算数の授業外の時間にも、自主的に取り組めるようなアクティブ・ラーニングとした。2nd ステージ終了時の評価は、すべての九九を網羅した九九 81 問プリントで学級ごとの九九の習得状況を評価した。3rd ステージは、先述した 3 つの型に分類した誤りの多い児童に絞り、特性に応じた練習方法で未習得の九九のみ繰り返し練習するように促した。結果として、個の特性に応じた指導や支援や配慮を組み込んだ算数の授業モデルの基本形を示すことができた。

③「中学校数学版 MIM-PM～めざせ正負の計算マスター～（試案）」

田中 智樹（岐阜県立不破高等学校）

異教科・異単元の MIM 開発として、中学校数学版 MIM～めざせ正負の計算マスター～（試案）について研究を行った。アセスメントは、「めざせ計算名人」をもとにし、数系列の問題と計算問題の構成とした。計算問題は、正の数、負の数の 1 桁同士の 2 数の加法減法の 8 問を 1 つのサイクルとし、同符号や異符号の和、差を求める問題等から構成している。数系列問題は、4 つの数列のうち、1 つを穴埋めとする形式とした。負の数も範囲に含め、負の数から正の数になったり、正の数から負の数になったりする問題などから構成している。指導についても研究協力者と協議している段階であるが、中学校は教科担任制であり、学級担任と異なる場合もあるため、宿題として実施する方法や学級担任と連携した指導の在り方を検討している。

多様な学習ニーズを持ち、生徒間の学力差も大きい本校では、個の学力に応じた指導のあり方を充実させることが大変重要であり、ＴＴの導入やこの特性に応じた配慮を組み込んだ授業モデルの提示などシンポジウムの事例は先駆的な取組みとして大いに参考にしたいと感じた。

（３）自主シンポジウム　「行政・学校・特別支援学校のセンター的機能が連携して取り組むポジティブな行動支援について」

徳島県では、幼・小・中学校における学校全体で取り組むポジティブな行動支援（School-Wide Positive Behavior Support:SWPBS)の推進に取り組んでいる。本取組開始以来、３年間で徐々に SWPBS の考え方が広まり、取組校園の数も増加してきた。特に SWPBS は学校園に在籍する幼児児童生徒に対して３層の支援モデルを採用し、各層に対する支援を行うことで、学習環境を整えることが柱となっている。シンポジウムでは、徳島県におけるこの取組について行政、実践校、サポートする特別支援学校のセンター的機能の立場か、これまでの具体的な成果や課題、今後の展望について話題提供があった。

①「徳島県教育委員会が推進する SWPBS について」　　樋口 直樹（徳島県立総合教育センター）

学校園で起きる問題（暴力、いじめ、不登校など）の大部分は、幼児児童生徒の「行動」の問題と捉え、こうした行動の問題に対して効果的に対応し望ましい行動を増やすための枠組みとして SWPBS を推進している。幼児児童生徒全体を対象として、第１層（学校・学級規模）、第２層（配慮が必要な一部の幼児児童生徒）、第３層（特別な支援を必要とする特定の幼児児童生徒）に対する階層的で連続的な支援を重視している。特に、問題行動を解決するために、「問題行動を罰する」のではなく、「望ましい行動を育てる」ことに着目し、「教えること・承認すること・環境を整えること」の３つのポイントを重視している。実際の運営においては、大学教員の専門家アドバイザーとの協働により、指導主事による研修開催、学校園に対するコンサルテーション等を実施している。

②「加茂小学校での SWPBS の取組について」　安宅 咲貴（東みよし町立加茂小学校）

加茂小学校での SWPBS の取組は５年目を迎えた。教育委員会の指導主事、特別支援学校のセンター的機能によるサポートや専門家アドバイザーのコンサルテーションを受けながら、SWPBS に取り組んできた。教職員で作成した「行動目標設定表」の「３つの大切」について共通理解し、それぞれの学年や学級毎の実態に応じた SWPBS の取組を行っている。継続した取組により SWPBS の手法が浸透し、教員と児童が一緒になって SWPBS に取り組む体制が整ってきた。特別支援教育コーディネーターが校内をコーディネートする際にも、ポジティブな行動支援の考え方に基づいて行っている。

③「SWPBS の取組を支援する特別支援学校のセンター的機能について」　中川 隆士（徳島県立池田支援学校）

加茂小学校を含む徳島県西部地域（三好郡・市）唯一の特別支援学校である池田支援学校では、長年にわたり特別支援学校のセンター的機能を発揮し、地域の保育所・幼稚園から高等学校までの幼児児童生徒を対象とした地域支援を行ってきた。池田支援学校は、加茂小学校を含む県西部地域を対象として相談支援活動を行っている。話題提供者は、相談支援担当として実際の幼児児童生徒への支援に当たる際、ポジティブな行動支援の考え方に基づいた支援を行い、学校全体に支援の輪が広がるよう SWPBS の考え方の普及にも努めている。

自主シンポジウムに参加することから、生徒の問題行動への対応・指導が必要な場面で、「望ましい行動を育てる」という視点を持つことの大切さを実感できた。問題行動を起こす生徒への支援の必要性についての認識を、教員がしっかりともち、行政や関係機関と連携しながら行動目標を設定していく取組みは、支援の必要な生徒が多い本校においても大切な視点であるとわかった。

（４）自主シンポジウム　「高等学校の個別の指導計画・教育支援計画について考える」

個別の指導計画・教育支援計画は、特別支援教育の要となる。これらの個別計画の作成率は、年々高くなってきていることが報告されている。ところが高校教育における個別計画の作成率は、小中学校に比べ低い。また、高校における個別計画は中学校との連携、卒業後の進学や就労を見越した支援など、小学校、中学校とは異なる難しさがあると考えられる。高校卒業後における支援、例えば就労支援場面や大学での発達障害学生支援において高校卒業後に向けた支援が十分なされていたの

か、対象生徒の特性を踏まえた長期的な視点に基づく教育支援計画がしっかりと作られていたのか疑問に思われる事例に出会うことがある。シンポジウムでは、高校における個別の指導計画・教育支援計画の作成や活用の実態、中学校との連携とアメリカの高校での IEP の例を紹介し、今後の高校の個別の指導計画・教育支援計画の在り方について発表された。

①「中学・高校における個別の指導計画・教育支援計画の概要とあり方」

岡野 由美子（奈良学園大学人間教育学部）

発表者は、H 県の教育委員会及び特別支援教育センターの立場から特別支援教育に関わってきた。これまで、H 県では中学校から高等学校への引き継ぎが円滑に進められるような取り組みが実施されてきている。これは、各学校の特別支援教育コーディネーター、特別支援学校のセンター的機能により地域支援にあたっている教員らの交流の中で、各地域で引き継ぎのあり方について取り組まれ、やがて全県に取り組みが発展してきたところが特徴的である。そして、その中で、個別の指導計画・教育支援計画は重視され、作成が進められてきている。また H 県では、高等学校における通級による指導が始まった初年度から全国的に見ても多い９校に設置された。高等学校からの要望等により中学校における個別の指導計画のあり方を改めて整理するきっかけとなっている状況がある。また、通級については問い合わせが増える一方で、高等学校に引き継ぐことに対する保護者の懸念が強く、それを払拭する取組みなども必要となっている。

②「高校での個別の指導計画・教育支援計画」

南波 聡（長崎県立豊玉高等学校）

発表者は、現在県立高校で校長として勤務している。これまで、特別支援教育コーディネーター、教育相談部主任（カウンセラー主任）、教務主任として校内委員会の設置・運営、個別の教育指導計画及び支援計画の作成にあたってきた。また、平成 24 年度から７年間を別の県立高校及び元の在籍校の２校で教頭として勤務した。２校とも在職時に県教委から特別支援教育の研究指定を受けており、両校において通常学級の中での特別支援教育に力を入れた。学級担任、特別支援教育コーディネーター、特別支援教育支援員、スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカー等と協力しながら、それぞれの生徒に応じた教育を実践する中で、特別支援教育への教員の理解、校内研修のあり方、個別の指導計画及び教育支援計画の作成の仕方と効果的な利用、進路指導について工夫を重ねてきた。校外では関係機関との連携、中学校からの実用的な引き継ぎ等について様々な課題を感じ、困難な問題に直面する事も経験している。本シンポジウムでは、演者の経験、演者の勤務する学校の教職員の取り組み、及び学校を支える地域社会の現状から課題があがった。

他校通級を含む通級指導を研究している本校でも、中学校との連携や個別の支援計画の引継ぎなどは大きなテーマである。他県の取組み事例として発表を大変興味深く聞くとともに、中学校と連携しながら個別の支援計画を高等学校で作成することは、どこの自治体でも大きなテーマであると感じた。

今年度は、従来の対面型ではなくオンラインによるシンポジウム形式であった。学会における研

究大会の意義づけとしては、研究成果の公開や討議により生まれた新たな知見の共有などがあるが、研究大会における人的交流と情報共有もまたその一つである。特に、特別な支援を必要とする生徒への支援方法や実践例は、個別具体的なものの蓄積が大きな意味を持つ。

オンラインによる実践例の発表はしかし、データを繰り返し参照できる点やデジタル資料を共有できる点など、学会後に知見を教員間で共有するにあたってはメリットも多いことに気付いた。新型コロナウイルス感染症対策で従来の教育活動が停滞する中でのオンライン開催ではあったが、今後の本校の教育活動に、大いに活用できるきっかけとなった。

Ⅵ　令和２年度文部科学省研究事業「多様性への対応に関する調査研究事業」に関する研究発表会報告【令和２年 11 月 19 日（木）】

【目　的】

平成 30 年度から令和２年度の３年間の計画で実施された文部科学省研究事業について、その研究成果を全県に周知するため、研究発表会を開催する。

【配信日時】　令和２年 11 月 19 日（木）13：30～12 月３日（木）17：00

【開催方法】　オンライン配信

【対　象】　県内公立学校教職員（希望者）

【参加人数】　18 名　(14 校)

【内　容】

・あいさつ（県教育委員会）
・文部科学省委託事業３年間全体の概要
・各班の発表（成果と課題・今後に向けて）
・動画コンテンツ

【配信に向けて】

従来は対面で実施していた本発表会は、新型コロナウイルス感染症防止対策の観点から、当初の計画を変更し、オンラインでの開催となった。

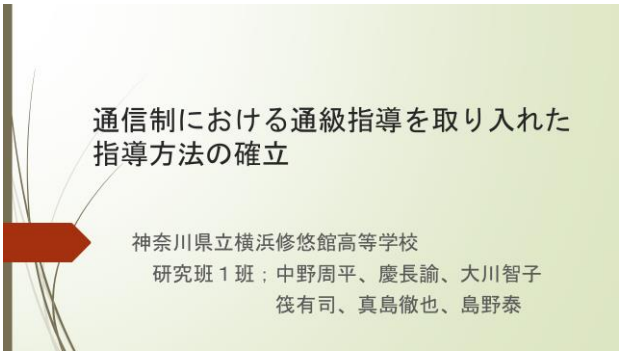
開催にあたっては、各班から配信作業担当を選定し、動画編集方法や配信方法の検討を行った。また、配信に向けた動画の編集は次の手順で進めた。

①各班の研究内容をまとめたパワーポイントに音声を吹き込み、動画形式(ＭＰ４)で保存
②肖像権保護の観点から各写真のモザイク処理
③動画編集ソフト「ロイロスコープ」で結合
④タイトルの差し込み、各動画の音量・画質の微調整
⑤画面録画ソフト loom を用いて学校長のコメントをワイプ入りで撮影し、動画の最後に配置

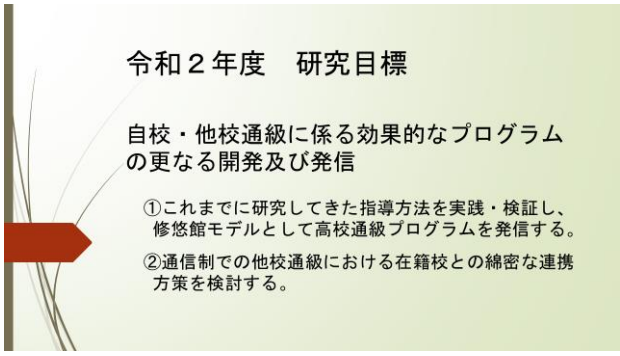
編集後の動画は神奈川県教育委員会と連携・調整し、希望者に配信した。また、検討委員へはＤＶＤに書き込み、配付した。配信動画は視聴者の勤務校における校内研修の素材として活用されるなど、好評を得た。

【各班の発表資料】１班

1

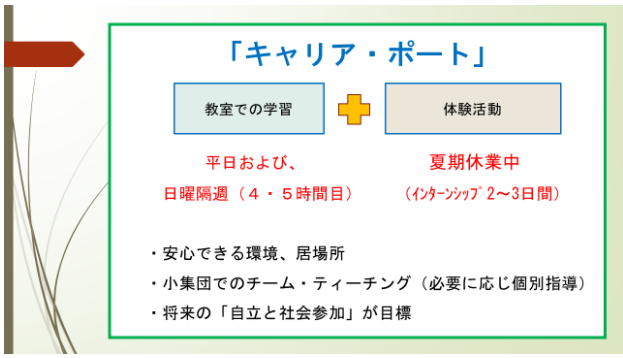


2



3

4



5

6

7

8

9

（２）成果と課題

①生徒の変化・成長
→自信、自己理解、自己肯定感、意欲、
仲間意識、相談する力

②教員側の気づき
→生徒理解、キャリア教育の重要性、
得意を伸ばし苦手を支援

10

10

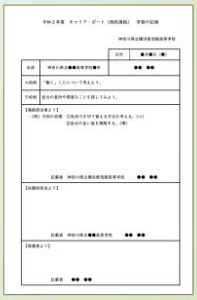
コロナ禍における新たな取り組み

11

他校通級における巡回指導の重要性

①在籍校への巡回指導における情報共有の重要性

②持続可能な学習記録の開発



12

今後に向けて

①高校教員の通級指導に対する認知度の向上
②一貫した指導のための情報共有の在り方
③県教育機関との連携方法の具体化

【各班の発表資料】２班

1

ICTを活用した多様な学習指導体制の構築

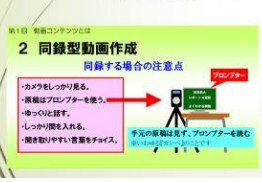
神奈川県立横浜修悠館高等学校
調査研究班２班；桑島 隼、二宮 佳菜、深田 幸宏

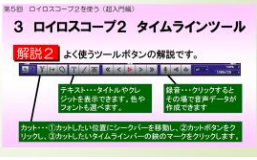
2

動画コンテンツ（２班）

（１）実践

○動画作成のための教員向け研修の実施
○新たな動画コンテンツの作成



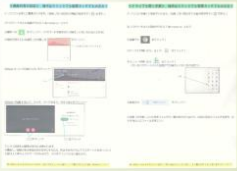


3

ICT活用（２班）

（１）実践

○Chromebook（パソコン）の設置と実用化
・［Chromebook部屋］を常設
・利用マニュアルの作成



4

ICT活用（２班）

（２）成果

○生徒のPC利用に必要な力が向上
○学習環境の改善
○通信制における「主体的・対話的で深い学び」の実践が可能に

（３）課題と今後に向けて

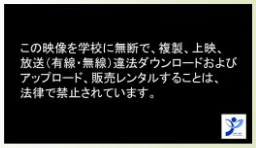
○アカウント管理

5

動画コンテンツ（２班）

（１）実践

○動画作成のポイントや工夫
- 撮影スタイルの指定なし
- 動画時間は短く
- 注意事項を表示した共通スライドを使用
- アニメーションや効果音等を使って興味関心を高める
- レポートに沿った内容　など



6

動画コンテンツ（２班）

（２）成果

○動画コンテンツ数（2020年10月27日時点）
536本　→　747本

（３）課題と今後に向けて

○動画作成時間の確保
○より良い動画作成に向けて

7

PDF形式ファイルによるITレポートの提出（２班）

（１）実践

○IT講座「地学基礎」（講座登録者10名）
- 受講者向け資料の配付
- 前期最終レポートにおけるアンケートの実施
- ペンタブレットによる手書き添削

8

PDF形式ファイルによるITレポートの提出（２班）

（２）成果

○word形式のデメリットを解消
- フォントが崩れない　・回答欄が明確化

○添削における新たな発見
- 視覚的、直接的な添削が可能に

（３）課題と今後に向けて

○新たな可能性
- 「手書き」の利点
- 選択肢の１つとして

9

Classi（２班）

（１）実践

○生徒への利活用呼びかけ
- ID、パスワードの配付
- マニュアルの設置と送付

○活用状況の調査

10

Classi（２班）

（２）成果

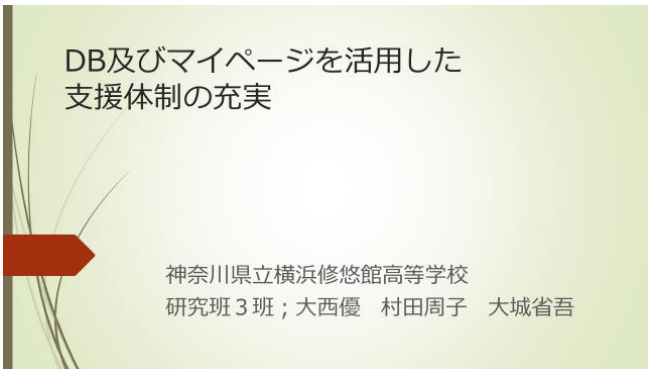
○活用生徒数の確認
○「生徒への呼びかけ」の有効性

（３）課題と今後に向けて

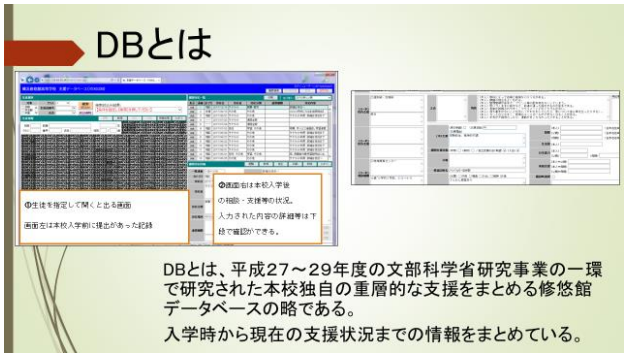
○環境整備の重要性

【各班の発表資料】３班

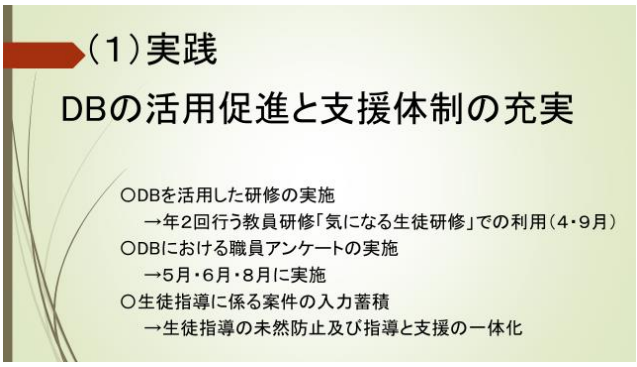
1



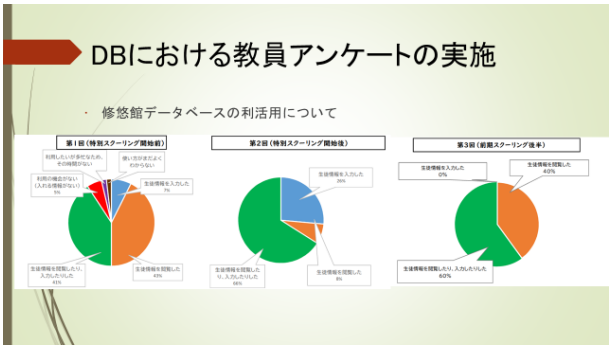
2



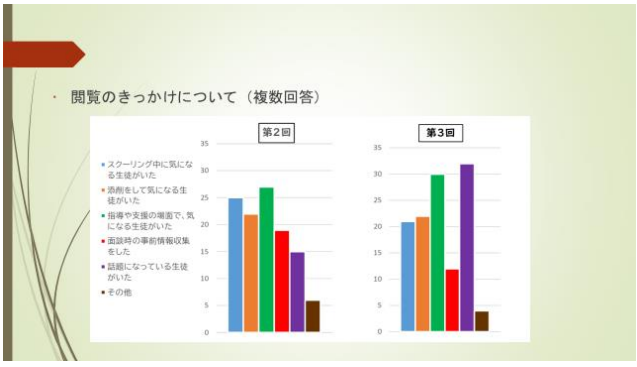
3



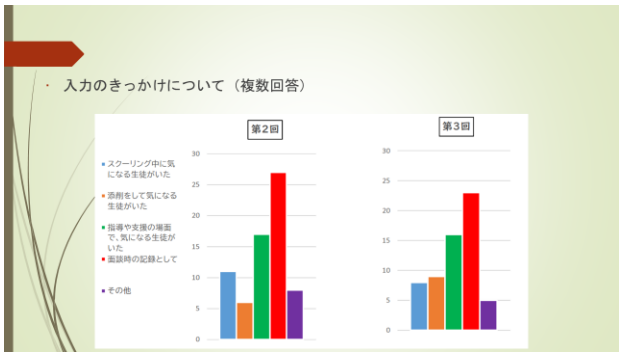
4



5

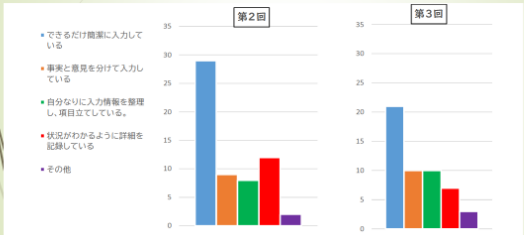


6



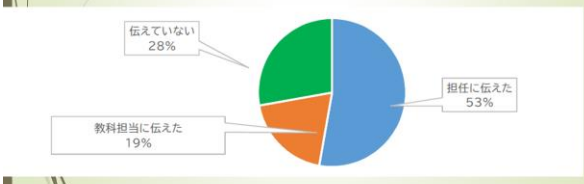
7

・入力時に気をつけていること（複数回答）



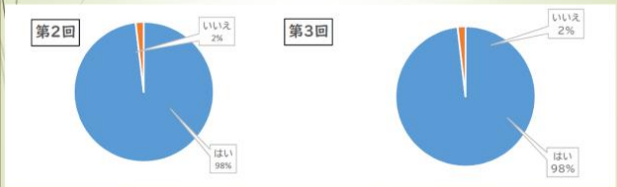
8

・第3回アンケートより
・入力後の情報共有について



9

・データベースを利活用することで生徒理解は深まったか



10

・第3回アンケートより
修悠館高校での気になる生徒とは（抜粋）

・コミュニケーションの課題
（伝わりにくい、伝えられない、人との距離感、スクーリング時の授業態度や目線、一方的で話が長いなど）
・発達上の特性や精神上の特性
・学習面での困難さ（文字が特徴的）
・希死念慮、自傷行為
・清潔感の欠如
・家族関係

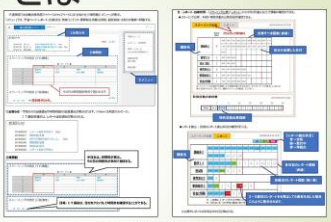
11

生徒指導の案件の入力蓄積

DBを生徒指導で活用していくためには、生徒指導の案件をDBに記録し蓄積していくことが重要である。
この蓄積が次の生徒指導案件を減少させるツールとなる。

12

マイページとは



横浜修悠館高校の独自のe-ラーニングシステムである。
学校で作成したレポート解説動画の閲覧、レポートの提出状況及びスクーリングの出席回数の確認や、お知らせの受信、個別相談の送信などができる。

13

（1）実践
マイページを利用した生徒へのアプローチ

○マイページの利用方法について生徒への周知
→全生徒対象にマイページが活用できるか調査（SHR）
○マイページの使い方支援、環境整備
→使い方を校内インフォメーションシステム等で案内し、
利用できない環境の生徒にはChrombook及びWifiルーターの貸し出し
○マイページのお知らせ機能の充実
→通信紙の重要情報の配信

14

（2）成果と課題

○マイページの利用方法について使い方支援及び環境整備
・校内インフォメーションシステム等で使い方の発信
・Chromebook及びWifiルーターの貸し出し
○マイページお知らせ機能の充実
・通信紙発送の際は必ず発信
・教科からの連絡事項増加
○『第13回悠遊祭（文化祭）Web開催』実施
・79本の動画作製配信
・視聴報告による生徒の特別活動の確保

文部科学省
「多様性への対応に関する調査研究事業」

令和２年度　神奈川県立横浜修悠館高等学校

【検討会議委員】

氏名	所属・職名
増田　謙太郎	東京学芸大学教職大学院　准教授
冨田　倫子	横浜市こども青少年局青少年部　青少年育成課　係長
岩本　真実	K2 インターナショナルグループ　NPO 法人ヒューマンフェローシップ代表理事
山　義明	横浜市立中和田中学校　校長
漆原　真美	横浜修悠館高等学校保護者コミュニティ　代表委員
大磯　美保	神奈川県立総合教育センター教育相談部教育相談課　課長
増田　年克	神奈川県教育委員会教育局指導部高校教育課　課長
永末　福太郎	神奈川県教育委員会教育局指導部高校教育課　指導主事
伊藤　輝章	神奈川県教育委員会教育局指導部高校教育課　指導主事

【校内委員】

氏名	職名		所属・職名
原口　瑞	校長		総括
塚越　幸雄	副校長		総務
米山　教子	教頭		総務
城田　弘子	事務長		会計事務総括
青山　晃	総括教諭	研究主任	地理歴史・公民科（キャリア教育推進グループ）
中野　周平	教諭	１班班長	理科（学務グループ）
桑島　隼	教諭	２班班長	理科（学務グループ）
大西　優	教諭	３班班長	理科（学校運営グループ）
大川　智子	教諭	１班	外国語（英語）科（学校運営グループ）
慶長　諭	教諭	１班	地理歴史・公民科（教育相談・学習支援グループ）
筏　有司	教諭	１班	理科（学校運営グループ）
真島　徹也	教諭	１班	地理歴史・公民科（教育相談・学習支援グループ）
島野　泰	総括教諭	１班	地理歴史・公民科（教育相談・学習支援グループ）
二宮　佳菜	教諭	２班	地理歴史・公民科（学校運営グループ）
深田　幸宏	教諭	２班	地理歴史・公民科（学務グループ）
村田　周子	教諭	３班	外国語（英語）科（教育相談・学習支援グループ）
大城　省吾	教諭	３班	保健体育科（生徒活動支援グループ）

文部科学省「多様性への対応に関する調査研究事業」
～通信制課程における多様な学習ニーズを支える持続可能な体制の構築～
令和２年度　最終報告書

令和３年３月発行

発行者　神奈川県立横浜修悠館高等学校

編集者　文部科学省「多様性への対応に関する調査研究事業」調査研究校内委員会

印刷・製本　山口印刷所